

「テーマ学習」報告集

～第2集～

筑波大学附属駒場中・高等学校
教務部・研究部

目 次

I はじめに	226
II テーマ学習実施の概要	228
III 96年度テーマ学習の計画・内容	236
IV 97年度テーマ学習の計画・内容	260
V テーマ学習実施後のアンケート	284
VI 成果と今後の課題	291

「テーマ学習」報告集

～第2集～

筑波大学附属駒場中・高等学校
教務部・研究部

I はじめに

完全学校5日制が2002年度より実施される。それに合わせて教育課程も大幅に変更される予定で、その基本方針について検討を進めている教育課程審議会の最終答申が、1998年夏に出された。そこにはいくつかの特色が見られるが、そのひとつに、小・中・高いずれにも「総合的な学習の時間」を導入することが挙げられる。これは、様々なテーマについて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習をより円滑に実施するために設けられた時間であり、各学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動を展開できるように設けられたものでもある。この時間を通して、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむことを目指している。

本校では、1993年度より中学3年生を対象として「テーマ学習」を実施している。

「テーマ学習」の目的は、中高一貫で高校受験がないという本校の特色を生かす一つの試みとして、次の2点を重視した学習活動である。

- ① 既存の教科では必ずしも包摂できない分野や内容をも含めた諸領域での学習活動
- ② 自らが選択したテーマを少人数で主体的に探求する学習活動

これは、現学習指導要領で中学に選択科目が大幅に導入されたことを契機に、総合学習検討委員会が設置され、そこで検討され実施に至ったものである。現在、本校教育課程に週当たり2時間配当されている。(次ページの本校教育課程表を参照)

そして、スタートしてから95年度までに実施された3年間分の内容については、すでに「テーマ学習報告集」(95年度作成)にまとめた。

実施当初は、講座を担当する教官の側も試行錯誤であったが、年を重ねて徐々に実践に磨きがかかってきたといえるだろう。また、運営面でもスムーズに行えるようになってきた。

そこで本集(テーマ学習報告集第2集)では、その後の2年間(96～97年度)に実施された内容を中心にまとめ、実施してからの5年間を総括する。具体的な内容は、次の通りである。

II章では、テーマ学習実施の概要について述べる。実施形態は、この5年間で変更されていないので、前集と重複する部分が多いが、最新の97年度に実施された際の資料を添付する。

Ⅲ、Ⅳ章では、96、97年度に実施されたテーマ学習の個々の内容について、評価も含めて掲載する。

Ⅴ章では、97年度に学習した生徒を対象としてアンケートを行ったが、その集計結果について報告する。

Ⅵ章では、今後の課題について述べる。

中 学 校 教 育 課 程

教 科 等	1 年	2 年	3 年	計
国 語	5	4	4	13
社 会	4	4	2	10
数 学	3	4	4	11
理 科	3	3	4	10
音 楽	2	2	1	5
美 術	2	2	1	5
保 健 体 育	3	3	4	10
技 術・家 庭	2	2	2	6
外国語(英語)	4	4	4	12
テ ー マ 学 習	0	0	2	2
道 徳	1	1	1	3
特 別 活 動	1	1	1	3
合 計	30	30	30	90
学 校 裁 量	2	2	2	6

(備考)

1. 表の数字は、週当りの授業時数を示している。
2. 特別活動の各学年1は、学級活動を行う。
3. 学校裁量で実施する内容は当面、学校が必要と認めた学習活動をおこなう。
4. テーマ学習は、少人数制の、教科に枠にとられない課題・分野の学習活動を行う。

98年度以降も、引き続き「テーマ学習」を実施している。そのねらいは同じだが、実施形態が多少変更になった。それは、これまで毎週連続2時間実施となっていたものを、隔週土曜日連続4時間実施とした。このことにより例えば、半日を使って校外に出てフィールドワークを行ったり、外部から講師に来てもらって講演をしてもらったり等の学習活動も実施しやすくなったと考えられる。つまり、形態の変更に伴い、内容が発展的に変容することをねらっている。その評価は、今後の実践に待つことになるが、当然、これまでの5年間の蓄積が基になるはずである。その意味でも、これまでの5年間を総括することは重要であると考え、第2集を刊行するに至った。

次はまた、新しい形態のテーマ学習についてもある程度まとまったところで、第3集を刊行したいと考えている。それは、さらに次の教育課程の「総合的な学習の時間」の実践についての貴重な資料となるはずだからである。

今後の本校の「テーマ学習」を発展・充実させていくためにも、多くの方々からのご指導、ご批判をいただければ幸いである。

Ⅱ テーマ学習実施の概要

1. 「テーマ学習」実施要領（1992年12月作成，1993～1997年度実施）

I. 名称の決定

名称は「テーマ学習」とする。ただし，関連する教科として，担当者の所属する教科名を通知表および指導要領に記載する。

Ⅱ. 「テーマ学習」の内容・展開方法の検討（教科の係わり方）

(1) 「テーマ学習」の趣旨

中高一貫で高校受験がないという本校の特色を生かすひとつの試みとして，次の2点を重視した学習活動を考える。

- ・既存の教科では必ずしも包摂できない分野や内容をも含めた諸領域での学習活動
- ・自らが選択したテーマを少人数で主体的に探求する学習活動

(2) 「テーマ学習」の内容

事前に掲示された複数の講座より，1つないし2つの講座を選択し，担当の教官の指導のもと，その講座の掲げるテーマを学習する。

(3) 講座の実施形態

- ① 週当たり連続2時間で半年間の実施を基本型とし，担当者は同一のテーマで前期・後期の2回にわたり実施する。ただし，通年での実施も可能とする。
- ② 生徒は，前期・後期で異なる講座をそれぞれ1つ選択する。通年実施の講座については1つだけ選択する。
- ③ 1講座の人数は，原則として15名以上とする。

(4) 講座・担当者と教科の関連

- ① 各教科は，可能な限り1講座は開講する。
- ② 複数の教科に係わる講座や教科外の内容を含む講座の開講も可能とする。
- ③ 講師が担当する講座の開講も可能とする。
- ④ 1講座の担当者は1名を基本とする。ただし，複数での担当も可能とする。

(5) 開講する講座の決定方法

- ① 1月当初に，各教科は開講する講座数を決定し，教科の総持ち時数を明確にする。
- ② 各教科は，講師時数が確定した後，講座のテーマ，担当者，開講期間，開講可能人数を教務に提出する。（各教科での担当授業決定時）
- ③ 教務はそれらをもとに調整を行い，時間割作成上可能な講座を決定する。
- ④ 講座数は6をめやすとする。
- ⑤ 時間割作成上，担当不可能な者が事前に明らかな場合は，その者は予め担当者の対象とは

しない。

- ⑥時間割作成時に開講不可能な講座が生じた場合は、その担当者の所属する教科内で講座（テーマおよび担当者）の変更を行うものとする。

Ⅲ. 評定・評価の仕方

次の要領で評価を行い、通知表および指導要録に記載する。

- ①評定は講座ごとに、A B C の 3 段階評定で行う。(学年末 5 段階評定は行わない)
- ②評定は基本型の場合は前期・後期の 2 回、通年実施の場合は 1 回行う。
- ③通知表および指導要録には、講座の担当者の所属する教科名とその評定を記載する。

Ⅳ. 生徒の選択方法

次の要領で講座の選択決定を行う。

- ① 4 月当初の授業時に、教務主催で生徒向けガイダンス（担当者による講座の内容説明）および選択希望調査を行う。
- ② 選択希望調査では、第 4 希望まで調査する。
- ③ 担任団は次の授業時まで、選択希望調査をまとめ、その結果をもとに調整を行い、前期および後期の全生徒の選択状況一覧を作成する。
- ④ 担任団は、選択状況を担当者と全生徒に知らせ、選択状況一覧を教務に提出する。

Ⅴ. その他（付随する諸問題）

- (1) 略
- (2) 略

(3) 実施後の諸問題への対処

- ① 実施後に、I～V の内容で実施上の支障が生じた場合は、その内容を再検討する。
- ② 実施後 1 年以上経過した時点で、校内研修会等でその内容を反省、検討し、その後の指導に役立てる。

2. 1997年度の年間スケジュール

- (1) 担当教科・担当者の決定（2月中）
- (2) 担当者の実施内容（生徒用資料）の作成と生徒への配布（4／8，10）
→ 資料1参照
- (3) テーマ学習ガイダンス（オリエンテーション）（4／15） → 資料2参照
 - ①担当者による学習内容の説明（プレゼンテーション）
 - ②希望調査
- (4) 選択の決定と発表（4／19） → 資料3参照
- (5) 講座実施
 - ①前期 4／22～10／7 評価提出（12月中旬）
 - ②後期 10／21～3／3 評価提出（3月中旬）

資料1-(1)

『テーマ学習』オリエンテーション

13:10～13:30 テーマ学習について

13:30～14:30 各講座の実施内容の説明

区分	教科	テーマ名	担当者	人数	教室	前期	後期
A	国語	歌舞伎	鈴木信先生	～10	221,ホブソ	○	○
B	社会	戦後史を学び書く	宮崎先生	～15	233	○	○
C	社会	戦後日本社会の変遷	小澤富先生	10～15	223	○	
D	社会	環境問題に取り組む	大野先生	15名程	地理室		○
E	数学	数学を創ってみよう	駒野先生	15名程	213, C. S.	○	
F	数学	「ガリレオ・ガリレイ」を読む	井上先生	～15	213		○
G	理科	地球探検～化石と鉱物	高橋先生	～15	地学教室	○	○
H	体育	スポーツトレーニング	合田先生	～16	トレーニング室	○	○
I	美術	絵巻物を制作する	土井先生	～15	美術室	○	○
J	英語	英語でコミュニケーション	寺田先生	10～15	LL教室	○	
K	英語	本物の英語に触れてみよう	鈴木文先生	10～15	231		○

前期は4月～10月、後期は10月～3月とします。

* C, E, Jは前期のみ、D, F, Kは後期のみ開講されます。

14:30～15:00 希望調査

A		テーマ名 歌舞伎	
担当者名	鈴木信好	期	<input type="checkbox"/> 前期のみ
可能人数	～10名前後		<input type="checkbox"/> 後期のみ
実施教室	<input checked="" type="checkbox"/> 一般教室 ²² / オープンスペース <input checked="" type="checkbox"/> 特別教室 (ビデオ使用)	間	<input checked="" type="checkbox"/> 前期・後期 <input type="checkbox"/> 通年
実 施 内 容			
日本の古典芸能(伝統的演芸)に可能な狂言・歌舞伎の			
三つのものがある。			
その中でも一番一般的なものが歌舞伎である。			
本校でも高一で、全員歌舞伎教室に参加している。			
そこで、今回は、歌舞伎の観し方と目的とした講座を聞く			
ことにした。			
ビデオを見ながら、解説をし、生徒諸君にも、作品を送る。			
知識を増やしてもらいたい。			
毎月、歌舞伎座、又は国立劇場で実際の舞台を見学予定。			
これには、毎月、5000円前後の金が必要となる。			
興味のある者の参加を希望する。			

- ・ 3月24日(月)までに大野まで提出して下さい。
- ・ 4月10日に新中3にこの内容を配布し、4月15日にリインテションと希望調査をします。
- ・ 前期は9月まで後期は10月からとし、それぞれ2時間×13程度の授業があります。

平成9(1997)年度

1997・4・14

日課係

テーマ学習担当の先生方へ

大野 新

◎明日(4月15日)午後オープンスペースにてテーマ学習のオリエンテーションを開きます。できるかぎり13:10にご集合下さい。

オリテ予定

13:10	開始	
		係よりテーマ学習設定のねらい, 選択についての注意説明
13:30	担当者説明 1人(5分) 厳守	
	A	鈴木信
:35	B	宮崎
:40	C	小澤富
:45	D	大野
:50	E	駒野
:55	F	井上
:00	G	高橋
:05	H	合田
:10	I	土井
:15	J	寺田
:20	K	鈴木文

資料を配布される場合や,
機器ご使用の場合は
事前にご連絡下さい。

(井上先生は授業のため, 5, 6校時の間に説明。従って順序入れ換える場合あり)

14:30	説明終了, 生徒の希望調査
15:00	終了

※なお, 希望調査は, 集計後来週月曜日までに受講者を決定しご連絡します。

テーマ学習希望調査用紙

組	番	氏名
---	---	----

区分	教科	テーマ名	担当者	人数	教室	希望順位
A	国語	歌舞伎	鈴木信先生	～10	221, ホール	
B	社会	戦後史を学び書く	宮崎先生	～15	233	
C	社会	戦後日本社会の変遷	小澤富先生	10～15	223	
D	社会	環境問題に取り組む	大野先生	15名程	地理室	
E	数学	数学を創ってみよう	駒野先生	15名程	213, C. S.	
F	数学	「ガリレオ・ガリレイ」を読む	井上先生	～15	213	
G	理科	地球探検～化石と鉱物	高橋先生	～15	地学教室	
H	体育	スポーツトレーニング	合田先生	～16	トレーニング室	
I	美術	絵巻物を制作する	土井先生	～15	美術室	
J	英語	英語でコミュニケーション	寺田先生	10～15	LL教室	
K	英語	本物の英語に触れてみよう	鈴木文先生	10～15	231	

希望順位について

* 第1希望から第4希望について、右の欄に1～4の数字を記入して下さい。

* CとEとJ、DとFとK以外については、前期と後期のどちらに受講するかは希望しないで下さい。教官側で調整します。(この方が多くの人の希望に沿えるので)

今後の日程

* 受講する2つのテーマは4月21日までに知らせます。

* 4月22日の授業より、前期のテーマの使用教室に行き、担当の先生の指示に従って下さい。

テーマ学習担当の先生方へ

先日の「テーマ学習オリエンテーション」ご協力ありがとうございました。その後、生徒の受講希望調査を実施し、受講生が決まりました。

第一希望のみで満員の講座や、前期のみの講座が第一希望のため、他方は必然的に後期になる生徒等があり、結果として前後期同人数でない講座もあります。この点、ご了承下さい。

生徒は全員が第一希望は受講できています。

生徒には、土曜日（19日）にすでに発表し、確認をとっております。

(1) 選択について問題がありましたら、お知らせ下さい。

(2) 出欠表もお配りしましたので、各時間毎に、コピーで担任にお知らせ下さい。

(3) 評価の伝票は、前期・後期終了の頃、係がお配りしますので、A・B・Cの評価をつけて、担任にお渡し下さい。

選択者人数一覧

	A 鈴木	B 宮崎	C 小澤	D 大野	E 駒	F 井上	G 高橋	H 合田	I 井	J 細	K 鈴木
前期	5	14	18	/	22	/	20	19	11	14	/
後期	6	14	/	22	/	17	18	18	9	/	19

なお、前期は 4月22日～10月7日（うち、5月20日は校外学習オリテ）
後期は10月21日～ 3月3日 です。

Ⅲ 96年度テーマ学習の計画・内容

テーマ学習(中学3年) 年間指導計画	年間時数
	全体会 10 テーマ別授業 (2×15)×2

週	国語「絵巻物を読む」 (須藤)	国語「江戸語から東 京語へ」(平田)	社会「基地の環境問 題と日米関係」(林)	社会「戦後の日本経 済を考える」(小澤)	数学「数学探検を楽 しもう」(駒野)
1	「春日権現験記絵」	江戸時代の 日本語の特徴	基地騒音問題と 住民の運動	「戦後の日本経済」 橋本寿郎著 岩波新書の 読書会	テーマの目的・進め 方・過去のレポート 回覧
2	「春日権現験記絵」				ベクトルを用いた ゲーム
3	「春日権現験記絵」	階層別の 日本語の性質	池子の米軍住宅と 緑の宝庫		規則性の発見 その1
4	「春日権現験記絵」				規則性の発見 その2
5	「春日権現験記絵」	江戸後期の 庶民の文化	横須賀基地と 非核三原則		自然の中に潜む数学 その1
6	「天神縁起絵巻」				自然の中に潜む数学 その2
7	「天神縁起絵巻」	江戸後期の芸能	超低空飛行と 空路使用のあり方		グラフ電卓と音波 感知器を用いたグラ フ その1
8	「天神縁起絵巻」				グラフ電卓と音波 感知器を用いたグラ フ その2
9	「天神縁起絵巻」	明治維新と文明開花	基地沖縄の人権問題	企業中心の社会と その変貌をテーマ にした講義	中間まとめと発表
10	「粉河寺縁起」			夏休みのまとめ ①戦後犯罪の特色と 変化 ②流行歌に	代数系を利用した組 合わせパズル その1
11	「粉河寺縁起」	東京語の成立	日米関係 経済・政治 外交・軍事	見る戦後社会の変 遷史③テレビに見 る戦後社会の歩み他	代数系を利用した組 合わせパズル その2
12 ↓ 15	「粉河寺縁起」 レポート中間発表	言文一致への流れ	まとめ 発表	レポート作成 発表	三角形のある内角を 求める問題1～2

(前期 … 4月～10月

後期 … 10月～3月)

数学「身近な数学を調べる」(城野)	理科「ショウジョウバエの生物学」(仲里)	保健「体を鍛える」(小沢)	美術「絵巻物をつくらう」(土井)	英語「英語でコミュニケーション」(寺田)	英語「マテリアルで学ぶ英語」(谷口)
オリエンテーション テーマについて	ショウジョウバエの 生活史	オリエンテーション、体力測定(1)とその方法、 トレーニングの基礎知識	概論	自己紹介(英語)インターネット取得した初回ハウスと官邸の資料比較	オリエンテーション
テーマ選び	ショウジョウバエの 飼育・餌作り	ターゲットトレーニング基礎 ウェイトトレーニングの基礎	概論	ホワイトハウスの資料の購読 初回ハウスの歴史等	映画で学ぶ英語 1
テーマ決定	形態観察・雌雄の見 分け方	ターゲットトレーニング発展 チューブトレーニング基礎	模写	ショウアンドテルの開始 アメリカの行事 1	映画で学ぶ英語 2
テーマ発表	未交尾雌とり	姿勢のチェック 自重トレーニング他	本作品構想	アメリカの行事 2	映画で学ぶ英語 3
中間発表資料作成	交雑実験 F ₂ まで 2 遺伝子雑種 伴性遺伝	コントレーニング 油圧式マシントレーニング ウェイトトレーニング 等	本作品構想	アメリカの行事 3	スピーチで学ぶ英語 1
中間発表会	配偶行動の観察		本作品構想	イギリスの民話の 講読 1	スピーチで学ぶ英語 2
中間発表会	初期発生の観察	メディシンボール トレーニング・ブライ イオメトリクス	本制作	講読 2	スピーチで学ぶ英語 3
中間発表会	唾腺染色体の観察	ウォームアップと クールダウン・スト レッチング	本制作	日米の食事のマナー の違い	インターネット入門 1
発表資料作成	核型分析	体力測定(2)ウエイ トトレーニング他	本制作	日本の主な年中行事 についてのレポート	インターネット入門 2
研究発表会	生体物質の抽出と 分析	オーバーユースのセル フチェック 他	本制作	日本の主な年中行事 についてのレポート	インターネット入門 3
研究発表会	まとめ	トレーニングのプロ グラミングの知識	装丁	ディスカッションと ショウアンドテルの まとめ	インターネット体験 1
研究発表会		スポーツライフマネジメント 年間トレーニング計画ピ キング体力測定 他	発表会 作品、制作ノート提出	日本の伝統的な文化 事象の発表	インターネット体験 2 まとめ

講座記号	96-A	テーマ	絵巻物を読む	担当教官名	須藤 敬
------	------	-----	--------	-------	------

1 テーマ設定のねらいと目標

現代の中学・高校生の古典嫌い・古典離れということ、時に耳にすることがあるが、そうした言い方の中身は、漠然とした印象によるものが多かったようだ。そこで本校国語科では、3年前から古典教材の編成の為の予備調査として、古典学習に対する意識調査、及び古典学習の前提となるべき、古典に関わる素養がどの程度のものなのかを知る為の基本調査を行った。その結果、現代の中学・高校生においては、古典から、ある日本的「風景」を再構成することが著しく困難になっていることが明らかになった。1例を挙げれば、日本家屋における「軒」とは、どこを指すのかがわかっている生徒が60%程度にすぎないということである（詳しくは本校「研究報告」32・33集参照）。古典を読んでも、具体的映像を思い浮かべられない。不慣れた古文を目で追うだけで何のイメージも喚起しえない。こうしたことが古典嫌いを生み出す1つの要因であるならば、中学3年という時期に、多くの絵巻物に触れ、古典世界を視覚的に捉える作業をしておくことは、古典学習にあたっての現状の問題解決の為の有効な方法となりえよう。またそのことは、絵巻物が古典学習の補助的絵画資料としてとどまるのではなく、古典学習の導入教材として、取り込めることの可能性を示唆するものでもあろう。

なお以上に述べたことは、近年、ますます充実してきた絵巻物の読解作業の成果が前提となっている。即ち、絵巻物を美術品として鑑賞するのではなく、詞書や同時代資料に照らし合わせることで、テキストとして読むべき対象として確立してきたということである。今後、こうした読解作業が絵巻物全般に及ぶことで、教材としての絵巻物の位置はより明確に定位することができるようになるであろう。

2 授業の進め方と評価

前期、全11回（1回＝2時間）の授業で、第1回～第8回は教授者による講義と生徒同士の協議。これは絵巻物のコピーと読解作業を進める為に必要な古典作品を授業のつど配布し、絵がどのようなメッセージを発しているかを生徒に自由に発言させながら授業を進めるもの。ただしコピーでは色がわからないので、取り扱う当該場面の絵を、教材提示装置でスクリーンに随時映し出すようにした。またこの間、生徒にはそれぞれ自ら扱うテーマの設定を考え、レポートの準備をさせる。

第9回～第11回は生徒のレポート作成の中間発表（1回7～8人、計22人）とそれに対する質疑を行う。中間発表の方法は、教授者が行ったことと全く同じ方法をとらせる。

第11回目の授業終了から2ヵ月後を締切りとし、レポートを提出させる。

3 生徒の選んだテーマと取り組み状況

1 5名の生徒が選んだテーマは以下の通り。

- A－幔幕について、年中行事絵巻を中心に。
- B－弓・弦巻について、犬神人の問題に関わらせて。
- C－昔の工事現場について。
- D－武士の世界、合戦絵巻から分かる鎌倉時代。
- E－絵巻物に見られる屋根、檜皮葺きを中心に。
- F－中世の工事現場から学ぶ。
- G－絵巻物に見るすごろく。
- H－東征伝絵巻を読む。
- I－垣根について。
- J－絵巻物に見られる武器について。
- K－法華経絵巻について。
- L－絵巻物に見られる楽器について。
- M－中世における枕について。
- N－絵巻物の中の履物。
- O－墓について。

始めは戸惑う生徒が多かったが、いくつもの絵巻を見ているうちに、似たような構図を見つけたり、同じ物が別の絵巻ではまったく違った描かれ方をされていることに気付いたりしているうちに、興味・関心が高まってきたようだ。しかし何かを発見しても、それをどのように1つの論として展開させていくかということになると、生徒が自力で解決するには少し無理があるようだ。今後の課題である。

4 問題点と今後の課題

まずテキストの問題がある。絵巻物の書籍は高価であるため、生徒個人が購入するには無理がある。少なくとも図書館には、中央公論社『日本の絵巻』正編・続編計57巻と平凡社『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻が常備されていることが望ましい。またそれらを映し出せる装置も必要であろう。

次に授業の進め方だが、今年度は講義中心になってしまった点が、課題として残った。しかしこのことについては、事前に資料を渡し、十分にヒントを与えておくことで、かなり改善できると思う。受講生の大多数は、歴史・文学に興味・関心を有する生徒達であるので、調べ方・考え方の筋道の示し方を工夫することで、例えば、前項で述べたような問題点も解決していくと思う。

講座記号	96-B	テーマ	江戸語から東京語へ	担当教官名	平田 知之
------	------	-----	-----------	-------	-------

1 学習の目標と教材

学習の目標

- ① 幕末から文明開花期の江戸東京を中心とする文化について理解を深める
- ② 共通語が形成される過程について理解を深める
- ③ 文化を形作る言語の働きについて認識を深める

教材

仮名垣魯文 「安愚楽鍋」

2 学習の進め方

① 一斉授業

- (1) 江戸語の成立
- (2) 階層によることばの違い
- (3) 江戸語から東京語へ

教材はまだ江戸の色を濃く残す文明開花期に牛鍋屋に集まった諸人の会話を記した戯作本である。種々の階層に属する登場人物がことばづかひの違いにより巧みに描き分けられている。そのことを理解するための前提知識として、3回を行った。

② テキスト輪読

教材は登場人物別に話が分かれているので、一人一話を予め分担して、ことばの意味や、話題となっている当時の風俗などについて調べさせ、発表させた。8回を費やした。

③ 研究発表

②で分担した範囲を中心として、各人が興味を持ったテーマについて10枚程度のレポートを作成させた。授業では自分の選んだテーマについて簡単な中間発表を行い、(授業1回分)、レポート提出は学期終了時を締め切りとした。

テーマは必ずしも教材本文に直接関わるものでなくても可とし、②の過程で興味を持った事柄について幅広く選択させた。主なテーマは以下の通り。

- ・「西洋医学と日本の医学」(教材分担は「藪医者の不養生」)
- ・「遊郭について」(同、「野幫間の諂諛」)
- ・「明治・大正期までの庶民メディアの変遷」(同、「新聞好の生鍋」)
- ・「江戸～明治期の食物とその変化 ～西洋料理の広まり具合など～」(同、「商法個の胸會計」)
- ・「芸者の仕事と時代」(同、「歌妓の坐敷話」)
- ・「横浜居留地と外人墓地」(同、「茶店女の隠食」)

レポートの作成に当たっては、文献の引用だけでなく、当地を実際に歩いたり、話を聞いたり、というような活動を伴う方法をできるだけとるように指導した。実際に自ら約束を取り付けて芸者にインタビューを試みる生徒もいた。

3 成果と今後の反省

成果

本校の生徒の現在を形作ってきた江戸・東京の歴史やことばについて、まとまって学習する機会は多くない。通常の教材ではまず扱われないような当時の文化の一端に触れさせ、生徒の好奇心にある程度揺さぶりをかけることが出来た。

今後の反省

生徒が今まで学習してきた教育課程や生徒の日常の文化活動と大きく隔たりがないような教材を選んだため、生徒にはかなりのとまどいがあったようだ。そのため輪読の発表において、単に辞書的な単語の意味調べの域をなかなか超えられず、実感を持って作品の世界に入り込むことがなかなか難しかったように思う。所与の時間数が決して多くないのに扱う内容が多岐にわたったため、焦点がぼけがちであったことは否めない。次の機会にはテーマをより絞って掘り下げるよう、指導計画の編成を再考したい。

講座記号	96-C	テーマ：基地の環境問題と日米関係	担当教員名：林 幹一郎
------	------	------------------	-------------

1 テーマ設定のねらいと目標

処分場汚染と基地騒音を中心に体験学習を実施した昨年の実践の中で、後者をレポートした多くの生徒が、飛行差し止めを巡る裁判の論理の他、安保廃棄の対案として不可欠の日米関係や対アジア関係の考察をするなど、問題の背景を多様に探り、日本社会の現状の解明と、これからのあり方に自主的に取り組む姿勢をみせた。映像や体験学習における自らの問いの提起と、レポートに見られる、事実に基づいて論理を緻密に展開しようとする態度は、生徒の『レポート集』を読んだ教員や住民運動に携わる人たち、弁護士などの方々からそれなりに高い評価を得たが、他方で、水俣病や原発など学習項目が広がりすぎて生徒自らが設定したテーマを煮つめる時間を削っていたことも確かであった。

今年は、学習項目をもっと絞って、生徒自身が決めたテーマの解明に多くの時間を保障したいと考え、テーマを「基地の環境問題と日米関係」に設定し直した。

今年のテーマ学習が、映像と体験の環境学習である点では、昨年と同じである。感性的な認識をビデオ映像で養い、現実の社会で問題を解決するために草の根民主主義的に住民運動をしている人たちの行動から学びながら、自ら論理的に解決策を提起させる。具体的には、日米安保条約と基地の存在によって、どのような環境問題や人権問題が生じているかを調べ、それに関連して平和のあり方や日米関係のあり方を考えさせる－これが目標である。

2 生徒への期待と見通し

通常授業の講義方式とは異なり、テーマ学習におけるビデオ映像は、騒音などの被害も被害住民の言い分も、基地を存続させる日本政府の見解も、基地を必要とするアメリカの高官や在日米軍の証言も生々しく、生徒にとって心に残るようだ。その感性的な認識が、昨年同様、自由な問題追究のバネになるものと思われる。

被害と闘う住民運動といっても、被害の背景にある社会の見方については単一ではなく安保に反対・賛成を問わず、夜間飛行だけはやめて「静かな夜を返して欲しい」という訴訟団の代表や、裁判の論理に徹する弁護士や、基地の運用改善と地位協定の部分的改訂を求める立場、安保条約そのものの廃棄を求める人たちなどさまざまである。それらの立場の異なる人たちとの質疑応答から、多様な考え方を学びながら、昨年の生徒たちがやり果せたように、自らの解決策の筋道をつくりだしていってくれるものと期待している。

3 生徒の反応

厚木・横須賀基地の見学の後の質疑応答では、騒音被害の他、在日米軍の犯罪に対する日米政府の対応、基地の地元産業振興への影響、在日米軍の各部隊の役割、米軍の核疑惑の根拠、米軍の代わりに自衛隊がする場合の戦力規模、自衛隊とアジアの戦力の比較などを巡りやりとりがあり、また、横田基地の訴訟団事務局代表幹事や弁護士、平和委員会事務局次長とのやりとりでも、自治体の防音工事対策、アメリカが横田に基地を置くねらい、これまでの夜間飛行差し止め訴訟の意義と限界、新しい1万人訴訟の意味、アメリカ国民に基地の被害を知ってもらう方法、基地全面返還のための運動の展望などについて盛んに食い下がっていた。

4 目標の到達度

到達度は、比較実験アンケートの結果と、レポートのできばえで計ってみた。事前・事後の変容のうち、顕著なものを少し挙げてみる。「私たちが、次世代の人びとが生存するのに必要なものを手に入れる権利を侵害するのは、やむを得ない」という考え方に、「そうは思わない」と、確信をもって回答した生徒は、プレテストでは4割台であった。テーマ学習終了後のポストテストでは、通常授業（環境問題に10時間ほどを割いた公民の授業）を受けただけの比較群の生徒の割合は変わらず、通常授業に加えてテーマ学習を受けた実験群の生徒は7割台になった。テーマ学習を通して、環境破壊に対する危機意識を強めていることが分かる。「日本の政府や自治体は、企業の利潤を優先させる政策より、操業停止や公害防除装置の設置命令など、公害企業に厳しい姿勢を取っている」という考え方に、「そうは思わない」と答えた生徒は、事前の4割台から、事後の比較群で5割台、実験群では8割台へと変わった。「環境は政府や企業の意志で処分するのが正しい」という考え方に、「そうは思わない」と答えた生徒は、事前の7割から、事後の比較群で変わらず、実験群では9割となった。「開発行為を中止する権利を住民に認めれば、環境悪化は防げるかもしれないが、経済活動は停滞し、国民の収入にとっても好ましくない」という考え方に、否定的に回答（「少し違う」と「そうは思わない」との合計）した者は、事前の4割台から、事後の比較群で5割台、実験群では8割台となった。ここには、環境問題を深刻化させる経済のあり方、環境問題への行政の不適切な対応、環境保全にとっての住民運動の意義などについて、環境問題への意識の高まりが見られる。これらは、基地の環境問題と日夜闘っている住民運動を、ビデオ映像や基地への見学と質疑応答を通じて、掘り上げて学習した結果といえる。

レポートには、環境被害の実態、環境悪化の原因、環境問題への立法・行政・司法の対応、問題解決のための住民の取り組みを調べた上で、自らの解決策を提起することを求めたが、生徒はそれによく応えている。見学地では、住民運動の代表や事務局の方、訴訟団の弁護士の話しを伺うだけでなく、レポートのテーマを深めるために、各自が予め用意した質問をぶつけた。そこで質疑応答が交わされた問題意識、例えば基地の環境問題とアメリカの経済的・軍事的な世界戦略の関係、覇権大国アメリカとの同盟への問い、在日米軍の犯罪の諸相、裁判所が違法状態と認めた騒音被害に対する日本政府とアメリカの対応、財界と国民・在日米軍と国民との間の利害対立、安保条約・地位協定と憲法（国民主権や人権保障規定）との矛盾、日本への核持ち込み問題、安保の必要性への根底的な問い、基地を撤去したフィリピンと日本との対比、米軍撤退後の自衛隊のあり方などは、レポートの焦点となって追究されている。レポートを書く際の五つの要求は、有効な結果を生んだと考えられる。

5 改善すべき点

自らの解決策を提起するという点では、生徒はよく考えており、政策的には評価し得るものが多い。しかし、政策は誰がそれを担うのかという、運動論的な視点も欠かせない。住民運動に触れたとはいえ、この点は生徒の視野におぼろにしか入っていない。行政との直接的対話が困難であったこと、裁判の傍聴が日程の関係で果たせなかったことが心残りである。

6 今後の展望

日本社会の現実問題に踏み込むためには、もっと外に出て行くことが必要である。高1でも、テーマ学習の機会を与えることが、豊かな個性的能力の開発につながる。

1 テーマ設定のねらいと目標

戦後50年を経過して日本社会は大きな変化を遂げた。この間、産業構造の変化だけを眺めれば、第1次産業分野から第2次産業分野や第3次産業分野へと、大きく就業人口は変わった。農業への新規学卒者は年間1700人と、かつて圧倒的な労働人口を吸収していた産業の面影は農業にはもはやない。農業ばかりではなく、戦後50年の間に企業間の再編が激しく進行した。国民経済の枠組の中で思考していた経済感覚は過去のものとなり、ポータレス経済の進行は、ワールド・エコノミーへと実態経済を導いていることは疑いない。個々人の意識も確実に変わり、「家」「村」などで構成されていた血縁・地縁社会は失われ、「会社」を核に構成される機能社会が出現し、個人意識は共同体的なものを見方を亡くし、一層の細分化へと駆られている。共同体意識の喪失と個人化への融解は、言わば市民と市民の連帯によって形成される「市民社会」とは違う「個人化社会」の到来を日本社会に感じさせる。家族の絆も質的な変化を遂げ、戦後社会を支えてきたものの変質が目に見える形で現われている。このような変貌が何故もたらされたのか、しかも、日本を取り巻く国際関係のドラステックな変化は、戦後日本社会をこの先どのようなものへと導いていくのか、興味あるテーマとなっている。

以上のようなテーマ設定の理由に基づき、まず現在がどのような時代であるのか経済的な側面からの理解を深めるために、「戦後の日本経済」（橋本寿郎著 岩波新書）の読書会から始めることにした。この本の、序「私の経験から見た戦後経済」、1章「日本経済はいま」、2章「敗戦から復興」、3章「飛躍的な経済成長」、4章「経済大国と経済成長のコスト」を生徒に選ばせて、レポートで発表させることにより、「今」が一体どのようなようにしてやってきたのかを、経済面から探らせることとした。次に各自に基本的には既に決まっているテーマを選択させ、戦後社会の変貌を跡づけさせることとした。

- 1) 戦後犯罪の特色と変化
- 2) 流行歌に見る戦後社会の変遷史
- 3) テレビに見る戦後社会の歩み
- 4) 戦後農村社会の変化
- 5) 戦後男と女の取り結ぶ関係変遷史

※6) 鉄道から見た50年史

※7) コメから見た戦後史

※印は生徒が独自に選んだもの

以上のテーマ設定の理由として、この50年の戦後世界の変化を、「共同体意識の崩壊と個人化」をキー・ワードとして確認していく。しかもそのことにより、「今」という時代が何なのかを、そして自分という現象が何なのかを探り出していくことが出来ればと考えている。

戦後50年の歴史の中で90年代に入り、戦後社会の大きな質的な変貌が姿を現してきた。着実に戦後社会が醸成してきたものではあるが、その変化は急激であった。国際関係構造の劇的な変化に誘因があることは否めないが、やはり、戦後日本を支えてきたものが大きくその質を変えたのは間違いない。血縁的・地縁的な共同体意識を母体として発展してきた日本社会に大きな変質が訪れ、それに対して旧来の枠組、企業中心社会や官僚システムではなかなか対応することが困難になってきた点などを挙げる事が出来るであろう。

このテーマ学習では「共同体意識の崩壊と個人化の進行が日本社会にどのような変質を与えているのか」実証してもらいたいと考えている

2 生徒への期待と見通し

価値観の相対化、多様な個性、情報化、個人化などの現代社会への浸透は、現代に

生きる多くの者達を波間を彷徨する筏にさえ思わせる。それは漂流する社会とも言える。ヒーリング(癒し)の音楽が流行するのが何故なのか、その答えを見いだすのはそれ程困難なことではない。或る児童文学者は、ある日火の付いた紙の束が投げ込まれるのを恐れて、郵便受けを小さくした。規範の喪失と個人の主張が重なるとき、個は行き先を失い暴走を始める。

今という現象が何なのか、今生きている自分たちが何なのか、自分たちは何故そう思うのか、そのような問題意識に基づいて、生徒各自がテーマの選択と問題の設定を行なってくれればと期待した。生徒は各自のテーマに基づき資料の収拾と整理を行う、その中で、問題解決のための方法と自分の存在意義への確信を掴んでくれるだろうと考えた。

3 生徒の反応

通常授業との関係で言えばその差を細かく検討し、比較していくのは困難であった。確かに少人数制であり、各自が自らでテーマを選択していくわけであるはずだから、通常授業に比較して問題に対する習熟度・授業参加の意識など高いものが想定されてよいはずであるが、残念ながらそのような明確な結果や資料を提起することが出来なかった。つまり強い意欲を以て課題に取り組み見事な発表やレポートを作成したものもいたが全員そうではなかった。中には自ら判断を行なっていくのに苦しむ子供やレポートの作成が出来ない者もいた。

4 目標の達成度

当初カリキュラムの中で計画していた、読書会による発表やテーマ発表及びレポート集の作成などは順調に行なえたが、内容的な課題である、「今という現象が何なのか、今生きている自分たちが何なのか、自分たちは何故そう思うのか」や「共同意識の喪失から個人化の誕生」に関する内省的考察に関しては現実化できなかった。年令的に課題の設定に無理があるせいかもしれないが、既成の概念から思考することに慣れている生徒にとって、今の自分という現象がなんであるのか捉え返すのは、かなり困難なことなのかもしれない。

5 改善すべき点

各自テーマを設定する際、テーマ設定の意味とそのテーマを選んだことで何が論証できるのかを徹底することが、問題意識をもたせ熱心に各テーマに臨む上で非常に重要なポイントになると考えている。そのような学習方法や機会をどのように準備していくかが最大の改善点だと考えている。

6 今後の展望

1997年度も同じテーマでこのテーマ学習を行なう予定である。このテーマ学習を通して、自分で学ぶこと、生きる意味とは何なのか、何故社会は存在しその社会はどうして変化していくのかなどを、現実の場の中から、個々の生徒が獲得していくことが出来たならと考えている。またテーマ学習という機会はそれと興えられる絶好の学習の場であると確信している。

講座番号	96-E	テーマ	数学を探検してみよう	担当教官名	駒野 誠
------	------	-----	------------	-------	------

1. テーマ設定のねらいと目標

生徒は数学の問題が解けたとき、その喜びに感動する。

一方、数学は与えられた問題があるいくつかの定型的解法によって解決するという演繹的・論理的な学習に終始するイメージを持っているようである。そこで、数学は帰納的な手法によって、ある仮説を立て、ひとつの数学を創っていくものという勉強法を味あわせてやりたい。そのことにより自分なりの小さな数学を創る喜びをもってもらうことがテーマ設定のねらいである。

約13回のテーマ学習のうち約9回は、担当者から課題を与えて考えさせたり、生徒からの課題をお互いに研究していく。夏季休業中を利用して、自分の研究テーマを見出し、研究してもらう。残る3回を中間発表、論文発表会に充てる。最終的には自らテーマを見出し、研究レポートを作成し、発表することにある。その研究の方法を学ぶのがテーマ学習の日常的な課題である。

2. 生徒への期待と見通し

授業では日常的に課題学習的なことを取り入れているので、生徒にとって全く新しいことを始めたという印象はないと考えている。テーマ選びさえうまくいけば半期でも少しは数学を創ることとはどんなことなのかを学ばすことが出来るのではないかと考えている。

生徒から積極的に問題意識をもって課題を提出することを期待する。それはなかなか難しいことであるが、自由に発言できる場と雰囲気をつくり、お互いに意見がスパイラルに回転して盛り上がるのがグループでの研究方法のひとつでもあるから、生徒には個性を出してもらいたいと考え期待している。

3. 生徒の反応(通常の授業との違い)

通常の授業との大きな違い

- ・一つのテーマ(課題について)を時間をかけて研究することができること
- ・自分が選んだ研究内容を発表して仲間に聞いてもらい評価してもらえること
- ・一般化や実験に時間を十分割くことができること

生徒も数学の成績とは無関係であるので、気楽に取り組める。

問題解法よりもむしろ、そこから問題を作成する力が求められことで、得意不得意が表れた。数学に興味・関心のある生徒が集っているのでその壁はハードルを低くすれば意外と簡単にクリアーできたと判断する。

4. 目標の達成度

各自(数人の班もある)が次のような論文を書いた。

①ゲームカックロについて、②数学は美を支配する(フィボナッチ数列と黄金比)、③積み4目並べの研究、④正多角形と接する円、⑤天秤の効果的な使い方、⑥とあるゲームについて、⑦同心円の面積の求め方、⑧ポーカの確率、⑨ルーレットに隠された数学、⑩問題を確率で考える、⑪小数を二進数で表そう、⑫ポロオミノの結合を考える、⑬SPROUTSの必勝法、⑭パラドックスについて

上記には、②や⑭のように疑問や聞いたことがあって不思議だと思っていること等を調べたものもあるが、多くは全く独創的な論文である。自分でテーマを決め、発表できたので一応目標は達成できたと考える。

5. 改善すべき点

日常のテーマ学習の時間で研究する、生徒からの課題がほとんど出てこなかったことが今後の大きな改善点であり、それをどう指導するのが大きな問題点でもある。生徒が興味を持っているのは日常的に数学が生きて働く姿をみたい欲求がある。まずは、調べたり・実験したりを多くすることが解決への手がかりと思える。

6. 今後の展望

調査(図書から)、実験(グラフ電卓、パソコンでのシュミレーションも含め)ができるものの課題開発が急がれる。また、班による研究活動を多くすることが5. の問題点を解決するキーになるかもしれないと考える。

講座記号	96-F	テーマ	身のまわりの数学を調べる	担当教官	城野正彦
------	------	-----	--------------	------	------

1 テーマ設定のねらいと目標

我々が日常に生活している中の身近にある題材から、各自が興味、関心のあるテーマを探してきて、それについて今までに学習してきた数学を用いてアプローチする。数学で学習したことを実際の生活に活用することにチャレンジさせるのがねらいである。

また、今自分たちが学んでいる数学がどのようにして作られてきたのかという数学の歴史を調べるのも目標の1つである。

2 生徒への期待と見通し

身のまわりにあるものから生徒がいかにおもしろいテーマを探してくることができるかどうか成否にかかってくる。自分だけでなく他の誰もが関心をもってくれる身近な題材で、中学生にとって過分の知識を必要とせず数学的にも分かり易く、さらに興味が発展的にひろがっていくようなものであればとても良い。そのような題材で発表がなされれば、生徒同士の活発な議論も大いに期待できよう。

3 生徒の反応

教師側から与えられた課題を解決するという授業形態に慣れているので、自分で課題を探してくるという作業は苦手である。自分たちの身のまわりから数学的なおもしろい題材を見つけるということはなかなか困難なことで、はじめに考えたテーマが調べていくにつれて壁につきあたり、途中からテーマの変更をすることになった生徒も何人かいた。それでも最終的には比較的身近な題材を見つけてきたので、発表のときに聞いている者があまり関心を失うことがなくて良かった。

4 目標の達成度

生徒の発表テーマは、「数字当てカードを解明する」「勝ち目はあるか」「数学的に勝つ」「世界の計算法をもとめて」「パラドックスのいろいろ」「金持ちはますます金持ちになるか」「光と影について」「テトリス」「魔方陣と図形陣について」「距離と角度と大きさと」「無限を数える」「古代の西洋数学」「数のマジック」であった。身近なものや歴史的な話題が多くあったので目標はかなりかなえられたと思う。

5 改善すべき点

できるだけ身近なものをテーマに取り上げ、聞いている人が理解できるように説明が難解にならないように指導した（中学の知識だけで十分に理解できる内容であることを前提とした）。本の内容をそのまま説明しようとする部分もあり、発表者の理解も不十分なために話題を全員で共有できなくなる場面があった。また、発表会以外の時間の使い方がどうしても教師主導になってしまうことが問題点である。

6 今後の展望

このような形式で、教科書的なものでない日常の我々の身のまわりにあるテーマを数学的にとらえてみることはとても有意義なことである。ゲームや賭け事など以外にも日常の生活につながるの深い事柄を数学的に解明してみようという気持ちを養っていく必要があると思う。

1. テーマ設定のねらいと目標

生物の実験や観察には、本来材料生物の飼育や栽培が必要であるが、通常の理科の授業の中では、時間的な制約もあり、動植物の飼育や実験材料の準備は専ら教師が行っていることが多い。この過程を是非生徒に体験してもらいたい、という思いから、飼育が手軽でしかもその生物を使っていろいろな観察や実験ができるショウジョウバエを選んでテーマ学習を組み立ててみた。実際に餌づくりからはじめて、ショウジョウバエを飼育しながら生活環を自然に理解させていく。そして現行指導要領でも取り上げられている「遺伝」の実験を十分な時間をかけて行わせ、あわせて、発生や行動、染色体観察など、生徒の関心をひきそうな実験を、適宜盛り込んでいく。これらの過程を通して、生物実験の楽しさと難しさ（これこそ研究者が日々の探求活動の中で実感していることなのであるが）を少しでも生徒たちに体得してもらおうことを、授業のねらいとした。

2. 生徒への期待と見通し

遺伝の実験に供する成虫の準備、また交雑実験そのものにはかなりの手間と時間を要する。このためには、通常のテーマ学習の週2時間だけでは到底無理であるため、始業前や、昼休み、場合によっては放課後に簡単な作業（飼育びん中の成虫の追い出し、麻酔と雌雄の判別など）が必要になってくる。授業選択者にはそこまで熱心に取り組んで欲しいと期待して、テーマ選択の全体ガイダンス時にこのことは生徒に伝えた。それなりの熱意をもった生徒たちが集まってきているものと期待している。

3. 生徒の反応（特に通常の授業との違い）

かなり根気のいる作業も全員の生徒たちが長時間集中して取り組んでいた（実験器具を1人につき1セット与えられるので、時間をもてあませない）。また、授業時間外の作業などにも積極的に取り組んでいた。本来理科好き生物好きの生徒たちが集まっているためか、作業手順の説明も何から何まで話さなくても自分たちで考えながら自分たちなりの工夫をして進めている様子が随所で見られた。そして、かなり高度な内容の講義にもついていけている手応えを感じた。普段の授業では必要な、動機づけや作業内容の周知徹底などがこのテーマ学習の授業ではそれほど必要ではない。これは少人数編成の授業形態であることも理由の1つであろう。

4. 目標の達成度

生徒たちには、遺伝実験を含め、3つの実験を選んで実験レポートを提出させ、これらのレポートの出来具合や感想などから目標の達成度を測った。彼らの積極的な学習態度から、概ね達成できているのではないかと期待していたが、レポート内容を見て、例えば遺伝実験など、十分に満足のいく考察にまで及んでいることを知った（例えば、交雑実験の結果の分離比をゆがめる生存率の違いなどに目を向けられている）。また、実験で大量のハエを誕生させ、また一方で殺しているために、「是非供養を行いたい」、との声が生徒側からあがり、普通の授業ではなかなか得られない手応えを感じた。

5. 改善すべき点

各実験と実験、観察と観察の間の連関がやや薄く、各実験が“読み切り”のようになってしまっている。半年間にわたる一貫したストーリーのようなものが授業背景として設定できれば良かったのでは、と思う（例えば「新しい生命の誕生」と称して配偶行動、遺伝実験、発生観察などを結びつけるとか）。

学校行事が入って授業がない週があると、遺伝の実験のように長期間のスケジュール調整が必要なものは非常にやりづらい。その分、授業のない時間、生徒に要求する活動の負担が増える（「生物は待ってくれない、生命は止まらない」という実感を生徒たちに植え付けるには逆によいが）。

今回のテーマ学習は、自由研究的なスタイルにはなっていない。これは授業の効率を優先させたためである（生徒たちが、どんな実験を行ったらよいか、またどんな実験なら自分たちにも可能なのか、普通の学習内容や短時間の文献調査からはなかなか判断することが困難だと考えた）。今後は材料だけ与えて実験テーマから生徒たちに考えさせるような自由研究スタイルの授業も検討してもよいかもしいない。または問題、テーマだけ与えて自分たちで実験方法をはじめから構築させるという方法も考えられる。特に行動学領域の実験ならばある程度はこのような授業スタイルも可能かも知れない。

6. 今後の展望

上記に掲げた、自由研究型授業への移行や、普通の中学・高校の授業との連関などを、十分に検討していきたい。

講座記号	96-H	テーマ	体をバージョンアップするためのトレーニング	担当教官名	小沢 治夫
------	------	-----	-----------------------	-------	-------

1 テーマ設定のねらいと目標

成長期は身体が完成していく時期であり、またスポーツ活動も激しくできるようになる時期でもある。したがって、この時期に効果的なトレーニングを行い、また栄養や休養のとり方などを適切にした好ましい生活を送っていくことが大切である。しかしこの時期は、発育の速度に個人差が大きく、発育の段階や体力に応じてトレーニングを行わないと、トレーニングが効果的でないばかりでなく、障害を引き起こすことにもなりかねない。

そこで、このテーマ学習では、自分の身体の発育発達に応じて、各種のトレーニングの方法を学び、さらには適切なスポーツライフを構築することができるようなちからをつけることを目標とし、学習を進めていく。また、生徒が参加するスポーツ種目に応用できるようなトレーニング法についても学習する。

2 生徒への期待と見通し

フリーウェイト、トレーニング用ゴムチューブ、トレーニングマシン、S（スピード）A（アジリティ：敏捷性）Q（クイックネス：素早さ）トレーニング用のラダー（縄ばしご）やミニハードル、などの各種トレーニング器具を用いて生徒の関心を引き出し、より積極的に、また自らの体をバージョンアップする楽しみをもってトレーニングに取り組むことを期待した。成長期でも中学の段階では進んだ段階での専門的なトレーニングは理解も実施も困難であるので、器具を用いたあるいは自分の体重を負荷としたようなトレーニングの初歩的段階について理解し、また実施できることを期待した。

3 生徒の反応

フリーウェイト、トレーニング用ゴムチューブ、トレーニングマシン、SAQトレーニング用のラダー（縄ばしご）やミニハードル、などの各種トレーニング器具を用いたトレーニングではこれまでに経験のないものであったためか、関心も高く積極的の取り組んでいた。また、日々のスポーツを中心とした項目から成る生活を記録するクオリティ・コントロール（QC）シートへの記録は驚くほどよくなされており、QCシートを考案者の筑波大学西島尚彦公私からも高い評価を受けた。

4 目標の達成度

トレーニングに関する理論はほぼ理解されていた。各種トレーニング方法の習得は体力が不足しているために必ずしも十分ではないものもあったが、高校生段階で発展的に活用することのできるだけの基礎はおおむね習得できた。

5 改善すべき点

中学3年生では心身の成長の差が著しいために、体力的にはもちろんのこと取り組む姿勢においても個人差が生じた。また理解力にも差があったために、高校段階で十分に発展できるまでのトレーニング方法の習得が可能な者も多かったが、テーマに釣られただけの目的意識の低い生徒の場合は表面的な理解に終わった者も若干見られた。その原因には、内容がやや多過ぎたことも考えられ、今後はひとつのものを開講期間を通して取り組むという明確性もあってもよいと思われた。

6 今後の展望

成長期には心身の個人差が大きいですが、至適トレーニングを至適時期に実施するためには、中学の段階からやや専門的なトレーニングにも取り組む必要がある。今回実施した学習を総括してみても、この時期からのトレーニングは、体力差や理解力の個人差があるもの、高校段階で発展させるためにも有効と考えられ、今後も引き続き実施される必要があると考えられた。

講座記号	96-I	テーマ	絵巻物を造ろう	担当教官名	土井 宏之
------	------	-----	---------	-------	-------

1 テーマ設定のねらいと目標

平安時代後期より、それまでの唐風の絵に代わり、日本で独自に工夫された絵巻物が盛んにつくられるようになった。それらは、幅30～50cm、長さ10～15cm程のもので、その多くは左手で持ち、右手で広げ巻き込みながら、移り変わる物語の画面や文章を楽しむようにできている。

本講座では、絵巻物の歴史的側面、文学的側面の理解を踏まえた上で、主にその絵画的側面を研究し、最終的には自身の想作による現代版絵巻をつくろうという試みである。

独自のストーリーによる絵本制作の面白さを、日常では経験することの少ない毛筆による絵画表現を通して体験すると共に、古典的絵画形態への理解を深めることを目標とする。

2 生徒への期待と見通し

事前のオリエンテーションにおいて、内容を理解した上で進んで受講してきており、作品制作に意欲を持っていると考えられ、中身の濃い制作とレベルの高い作品が期待できる。

3, 生徒の反応

生徒は自ら進んで受講してきており、制作意欲を持って授業に望んでいる。絵巻物というなじみの薄い表現形式は、その珍しさも手伝って、生徒の興味を引いているようである。半年間、積極的に制作を行った。

4, 目標の達成度

独自のストーリーによる絵巻物制作のおもしろさの体験、毛筆による表現の獲得、古典的絵画形態の理解という目標は、ほぼ達成できたと考える

5, 改善すべき点

物語の主題設定において、より深いものになるような指導が必要であろう。

6, 今後の展望

主題設定において、他教科との連携を考慮し、美術科にとどまらない総合的な学習になるような方向性を探る。

講座記号	96-J	テーマ：英語でコミュニケーション	担当教官名	寺田恵一
1 テーマ設定のねらいと目標				
<p>(1) 少人数の授業の特色を生かして、4技能のバランスの取れた発達をめざす。 (ア) 聞き、話す活動として、ショウアンドテルとディスカッションを行う。 (イ) 読む活動として、教材をパラグラフごとに担当者を決めて内容をまとめる。 (ハ) 書く活動として、自由(テーマ)作文やレポートをまとめたりする。 (2) クロスカルチュラルな視点から、授業と教材を編成し、生徒の異文化コミュニケーションに対する理解と能力を高める。 (3) (1)と関連するが、ビデオやテープ等の視聴覚教材を積極的に活用して、生徒の言語運用能力を高める。</p>				
2 生徒への期待と見通し(目標設定の理由と授業計画)				
<p>(生徒への期待) 上記の目標を設定した理由には、次に示すような「生徒への期待」がある。 (1) 少人数の授業なので、個々の生徒の指導をきめ細かくして、コミュニケーション能力を育成する。 (2) 異文化への関心を高め、自国の文化の発表を行わせて、発信型の教育を目指す。 (見通し) 授業計画は次の通りである。 (1) インターネットで検索したホワイトハウスと官邸の資料の比較 (2) アメリカの行事の紹介—ロングマンの教材を利用 (3) 日本の年中行事のレポート—各生徒は行事を一つ選び、50—100語の英語にまとめる。 (4) ショウアンドテル—毎回2名の生徒が発表 (5) イギリスの民話とマザーグースの紹介 (6) ビデオ教材と映画教材の活用 (7) ディスカッション (8) 日本の伝統的な文化事象のレポートと発表—最終の課題</p>				
3 生徒の反応(特に通常の授業との違い)				
<p>(1) 自己紹介のスピーチやショウアンドテルのような発表活動を通して、授業に参加しているという実感を持ち、通常の授業よりもアクティブな姿勢を示している。 (2) 日米の行事の比較などの、文化の比較に興味を示している。 (3) 17名という少人数なので、ショウアンドテルやテーマ作文(レポート)の原稿の校正と指導に時間をかけられるので、生徒の教官に対する信頼感が増したように思われる。 (4) 視聴覚教材として、音声教材や映画(ビデオ)教材を頻繁に使用しているが、生徒は興味を示している。</p>				

4 目標の達成度

- (1) 4技能のバランスのとれた発達という観点から活動を振り返ってみると、読む活動と書く活動はある程度目標を達成できたと思うが、聞き、話す活動はやや物足りなかった。
- (ア) ショウアンドテルは、全員の原稿を事前に添削できたこと、パフォーマンスを VTR に録画したこと、観衆の生徒に評価を行わせたことなどが良かった。ディスカッションは数回行う予定が1度しかできず、不満足な結果に終わった。
- (イ) 読む活動については、事前にパラグラフごとに担当者を決めておいたのは、パラグラフリーディングをするのに良かった。教材については、さらに内容を深める立場から精選していく必要を感じた。
- (ウ) 書く活動については、自由作文とレポートについて、生徒の原稿の添削を比較的丁寧にできたことが評価できる。
- (2) 異文化コミュニケーションをはかる立場から教材を収集して、一定の成果をおさめたと思われる。
- (3) ビデオやテープなどの視聴覚教材の使用は、生徒のコミュニケーションへの意欲と関心は高めたと思う。しかし、コミュニケーション能力の向上という面では、より効果的な教材を使用する必要を感じさせられた。

5 改善すべき点

- (1) 生徒のコミュニケーション能力を高めるための活動を、質的にも量的にも増やすことが大切である。そのために、ビデオやテープなどの音声教材の準備、スピーチとディスカッションの系統的な指導が求められる。
- (2) アメリカの行事についてのリーディングは、より内容を深めさせる必要を感じた。
- (3) 日本の伝統的な文化事象についての発表については、生徒に原稿を早めに用意させて、口頭発表の準備にもっと時間をかけさせるべきだった。

6 今後の展望

- (1) 生徒のスピーチのモデルにするスピーチ（昨年の生徒の実践例や、アメリカの大統領の演説など）を生徒に示したり、教師のアドバイスを生徒にもっと与えて、より効果的なスピーチの指導を今年度は行う予定である。
- (2) アメリカの行事については、事前に担当者を決めて、教科書だけでなくそれ以外の資料（百科事典など）も参照させて、より内容を深める。
- (3) 民話については、昨年使用した教材よりも短くて読みやすいものを選び、内容や結末（おち）について話し合う。
- (4) 日本の伝統的な文化事象の発表については、生徒の当日のプレゼンテーションについて、事前指導を強めることにする。

講座記号	96 - K	テーマ	マルチメディアで学ぶ英語	担当教官名	谷口 幸夫
------	--------	-----	--------------	-------	-------

1 テーマ設定のねらいと目標

本講座の目標は、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4技能をバランスよく養成するところにある。その方策として、「文字」「音声」「映像」の3要素を組み合わせたマルチメディア教材を活用してみたい。また、最近話題となっているインターネットを体験させ、最終的には自分の「ホームページ」を紙上で作成することを目標とする。

このテーマを設定した理由は、通常の授業と比較して、少人数制で授業を進めることが可能であること、LL教室という学習環境でどのような教材や課題を生徒に与え、彼らが何を学ぶことができるかということを探求してみたいからである。また、昨年度に行った実践を総括し、発展させる意味で、今年度は「ホームページ作成」という課題に挑戦してみたい。

2 生徒への期待と見通し（目標設定の理由と授業計画）

後期の授業全体を下記の4つのパートに分け、それぞれに課題を課す。

(1) 映画で学ぶ英語：

アカデミー賞受賞作品でもある「レインマン」をもとに、映画と原作との比較、速読、要約などの課題を提出させる。特にリーディング能力とリスニング能力を養成する。

(2) マンガで学ぶ英語：

日本の現代若者文化の1つとして目される「マンガ」のせりふを英訳することで、日英文化比較研究及び翻訳の題材となりうる。

(3) スピーチで学ぶ英語

キング牧師の有名なスピーチを暗唱させ、一人一人暗唱の様子をビデオ収録する。また、同時に各界の有名人のスピーチをビデオで鑑賞する。

(4) インターネットで学ぶ英語

インターネットを体験するために、インターネットに関して様々な事前調査をさせる。最終的には他のホームページを参考にし、自分自身のページを紙上で作成させる。

3 生徒の反応（特に通常の授業との違い）

オリエンテーションとして、海外へ手紙を出させて、資料などを取り寄せさせた。こうした作業が、最終目標であるインターネットのホームページづくりに密接につながっていくものと確信した。また、実際に身の回りの様々な資料などに当たることで、それが英語の情報であれば、即座に「教材」となるということを痛感したと思う。

通常の授業と比較すると、作業中心の授業であり、そういう意味でも「学習者中心」といえるものであり、インターネットも体験することができたので満足度は高いと思われる。

4 目標達成度（生徒の発表題目と評価）

<生徒の発表題目>

紙面の関係から、4番目の課題である自分のホームページに何を取り上げたのかを記載する。

- (1) 新しい新幹線（コマチ・ノゾミ 500系）
- (2) 時刻表
- (3) 様々なギター
- (4) マンガ
- (5) ビートルズ
- (6) 自分の創作ストーリー
- (7) 海外のバスルート
- (8) アイドル など

<評価方法>

次の4つの課題の取り組み具合、および提出状況を結果とともに、制作過程も考慮しながら評価した。

- | | |
|----------------------|-----------|
| (1) 「レインマン」についてのレポート | (リーディング面) |
| (2) 「マンガ」の翻訳作品 | (ライティング面) |
| (3) 「スピーチ」の暗唱 | (スピーキング面) |
| (4) 「ホームページ」作成課題 | (総合力) |

5 改善すべき点

前年度の実践では、ホームページ作成までは至らなかったが、今年度は当初から最終目標として設定しておくことができたのは好ましいことであった。というのも、紙上ではあったが、実際に自分でホームページを作成するという「目標」があったために、英語を「手段」として学習することができたからである。言い換えると、ホームページ作りに必要な（英語の）情報や資料を探しだし、また自分なりにわかりやすい英語で解説を付け加えるという作業を短期間に集中してできたからである。

このように、「手段」としての英語教育をもっと考慮に入れてもよいのではないかと思う。

6 今後の展望

本来なら、CD-ROMなどを駆使した、いわゆる「マルチメディア教材」を活用し、授業を展開していければよいと思う。また、コンピュータ上でホームページを作成することも可能であり、むしろ積極的に押し進めてもよい時期にきていると思う。しかし、英語教育の担う部分は、英語を正確に読んだり書いたり、聞いたり話したりすることである。そういう意味ではコンピュータ・リタラシーの養成は他教科に譲り、英語力の養成に重点を置いて指導すべきだと思う。

IV 97年度テーマ学習の計画・内容

テーマ学習（中学3年） 年間指導計画	年 間 時 数		
	全体会	10	
	テーマ別授業	(2×15)×2	(前期：4月～10月 後期：10月～3月)

週		国語「歌舞伎」 (鈴木信)	社会「戦後史を学 び書く」(宮崎)	社会「戦後日本社 会の変遷」 (小澤富)	社会「環境問題に 取り組む」(大野)	数学「数学を創っ てみよう」 (前期のみ・駒野)
1		荒事	はじめに	「戦後の日本経済」 (岩波新書 橋本 寿郎)の第1～4 章を読む	廃棄物は何か	テーマ学習のあり 方 ・自己紹介・過去 の生徒の論文紹介 ・課題解釈
2		和事	各人の関心のある テーマについて報 告・討論(その1)	同上	一般廃棄物	課題解決研究1
3		所作事	各人の関心のある テーマについて報 告・討論(その2)	同上	産業廃棄物	課題解決研究2
4		時代物	各人の関心のある テーマについて報 告・討論(その3)	同上	処分場問題(都市)	課題解決研究3
5		世話物	各人の関心のある テーマについて報 告・討論(その4)	同上	処分場問題(地方)	課題解決研究4
6		下座	各人の関心のある テーマについて報 告・討論(その5)	企業中心社会を考 える(1)	アジアやヨーロッ パの廃棄物問題と 対策	課題解決研究5
7		浄瑠璃との関係(1)	各人の関心のある テーマについて報 告・討論(その6)	企業中心社会を考 える(2)	リサイクルを考え る	課題解決研究6
8		浄瑠璃との関係(2)	各人の関心のある テーマについて報 告・討論(その7)	企業中心社会を考 える(3)	企業や行政の対応	課題解決研究7
9		役者(1)	各人の関心のある テーマについて報 告・討論(その8)	テーマ選択とその 研究発表 1. 戦後犯罪の特 色と変化	駒場の廃棄物問題	課題解決研究8
10		役者(2)	夏休みの作業につ いて	2. 戦後農村社会 の変化 3. 戦後の男と女 が取り結ぶ関係変 遷史 他	レポート作成	課題解決研究9
11		舞台上の約束	夏休みの成果報告	レポート作成	レポート作成	論文発表会
12		レポート	まとめ	発表	発表	論文発表会
15						

数学「ガリレオ・ガレレイ」を読む (後期のみ・井上)	理科「地球探検－化石と鉱物」 (高橋)	保健体育「スポーツトレーニング」 (合田)	美術「絵巻物を製作する」(土井)	英語「英語でコミュニケーション」 (寺田)	英語「本物の英語に触れよう」 (鈴木文)
テーマ学習の進め方 「ガリレオ・ガレレイ」を読む	化石の役割について (化石の採集)	まずは腹筋から	概論	自己紹介 Show and Tell の説明	自己紹介
ガリレオの主たる業績とその時代背景	採集した貝化石のクリーニング	動く身体を作る	概論	アメリカの行事(1) New Year's Day からEasterまで	インタビューを聞く(1) 身近な人
「新科学対話」上巻第1日を読む	化石の鑑定	どこでもできるトレーニング	模写	アメリカの行事(2) Independence Dayから Halloweenまで	インタビューを聞く(2) 芸能・スポーツ分野
「新科学対話」上巻第2日を読む	古環境の推定	バーベルの使い方(1)	本作品構想	アメリカの行事(3) Thanksgiving DayからNew Year's Eveまで	インタビューを聞く(3) アカデミックな分野
「新科学対話」下巻第3日を読む	固体変異1(形質評価)	バーベルの使い方(2)	本作品構想	イギリスの民話(1) 講読と感想発表	インタビューをする
「新科学対話」下巻第4日を読む	固定変異2(計測)	爆発的な力の出し方(1)	下絵製作	イギリスの民話(2) 講読と感想発表	ニュースを聞く(1) VOA(災害等)
グループの研究テーマを決める	固体変異3(統計)	爆発的な力の出し方(1)	下絵製作	ディスカッション テーマを決めて グループ討論	ニュースを聞く(2) VOA(スポーツ等)
グループ研究1	微化石の観察	プログラムの考え方	本製作	日本の行事 1つ選び口頭発表	ニュースを聞く(3) VOA(政治)
グループ研究2	化石の切断1	plan-do-see	本製作	日米の食事のマナーの比較 連読と概要把握	ニュースを聞く(4) VOA(科学ニュース)
グループ研究3	化石の切断2	plan-do-see	本製作	日本の伝統的な文化事象(1) 原稿検討	ニュースを聞く(5) VOA(科学ニュース)
グループ研究4	化石の研磨1	「おそわる」から「おしえる」へ	装丁	日本の伝統的な文化事象(2) 口頭発表(1)	ニュースを読む Student times 等
研究発表会	化石の研磨2 標本箱の作製	戻ったら丸めろ	発表会 作品・製作ノート の提出	日本の伝統的な文化事象(3) 口頭発表(2)	物語を読む 名作・笑い話・ミステリー等まとめ

講座記号	97-A	テーマ	歌 舞 伎	担当教官	鈴木 信好
------	------	-----	-------	------	-------

1 テーマ設定のねらいと目標

芸能は本来、人の日常生活と結びついているものであり、地域の生活や風俗・習慣信仰と言った様々の要素が含まれると考えられている。その面から考えると、現代でも祭と結びついた形での芸能を多くみることができる。これらの地域と結びついた芸能は、江戸期以前の日本のものをみる枠組みの一端を現代に伝えていると同時に、日本的な感情表現や、日常的な情趣をも伝えている。

しかしながら、本校の大部分の生徒の生活は、そのような地域生活を持ってはいない。

また、国語の現代文の分野を考えてみると、明治以降の近代化と、江戸時代以前との関連が大きな問題となっている。つまり江戸時代の思想、文化等が、近代化とどのような因果関係を持ち、日本の近代化の方向性の決定にどのように働いたかという点である。

これらの点を考えるにあたって、現代において江戸時代を具体的に知る手段は限られている。その時に「歌舞伎」は、有効なものであると考える。社会科（歴史分野）が扱うことの少ない文化面への理解にもなると考える。

2 授業の進め方と評価

(1) ビデオ教材

① NHKビデオ〈日本の伝統芸能〉

歌舞伎鑑賞入門

1. 荒事 2. 和事 3. 所作事 4. 時代物 5. 世話物

② 国立劇場

歌舞伎の魅力

- ・演技 ・立廻り ・女方

歌舞伎に生きる

- ・ 女方への道

③ 日本ビクター

日本古典芸能大系 〈歌舞伎〉

- ・ I 上下 仮名手本忠臣蔵 祇園一力茶屋の場
- II 上下 絵本太功記 尼ヶ崎閑居の場
- III 上下 勸進帳 安宅関の場・安宅関の場近くの山間の場
- IV 上下 三人吉三郎初買 大川端庚申塚
- 廊文章 吉田屋格子先の場・吉田屋奥座敷の場

(2) 参考図書

- | | | |
|------------------|--------|---------|
| ① 歌舞伎のキーワード | 服部幸雄 | 岩波新書 |
| ② 知らざあ言って聞かせやしょう | 中村又蔵 | 日本テレビ |
| ③ 囃子 | 田中伝左衛門 | 玉川大学出版部 |
| ④ とうざいとうざい | 片岡仁左衛門 | 自由書館 |
| ⑤ 絵は語る 彦根屏風 | 奥平俊六 | 平凡社 |
| ⑥ 絵は語る 湯女図 | 佐藤康宏 | 平凡社 |

(3) 歌舞伎鑑賞 (国立劇場 歌舞伎鑑賞教室 第50・51回)

- ① 神霊矢口渡 頓兵衛住家の場 (第50回 1997年6月)
- ② 外郎売 (歌舞伎十八番の内) (第51回 1997年7月)
- ③ 越後獅子 (舞踊) (第51回 1997年7月)

授業の展開は、生徒の歌舞伎体験がテレビで短時間見ただけと言うことなので、できるだけ舞台を見せることを中心とし、歌舞伎に慣れること、親しみを持ってもらうことを主なねらいとした。

江戸時代の理解については、実際の芝居のストーリーの解説や、時代物の成立事情の説明、和事と荒事の違いそれに伴い江戸と上方の相違を考えさせるなど、組込んでみた。

参考図書の使い方

中学生向けの適切な参考図書が見当たらなかったため、上記の図書を以下の様に使った。

- ① 各自の興味関心に従って自由に読み、質問に適宜答えた。
その際、折込の国立劇場の舞台および客席の構造の図面の解説を加えた。
- ② 国立劇場の養成課程出身の著者によるもので、比較的易しいと考えられるので、主として、江戸時代の歴史的な説明部分を輪読解説した。
- ③ 享受者の歌舞伎理解の為のものだが、付け帳の例として見せた。
- ④ ビデオ④「廊文章」を鑑賞する際、主役の藤屋伊左衛門を演じている十三代片岡仁左衛門が、自分の役作り演技解説をした部分を読ませた。

3 成果と今後の課題

成果 歌舞伎とほとんど接点を持っていなかった生徒が、全員興味を持ってくれた。勿論、総ての芝居ということではない。知識の面からも江戸時代の具体的な生活に対する関心を持たせることができた。

課題 実際の舞台を見る機会が少ない。
社会科に授業 (特に歴史) の関連性の確保。

講座番号	97-B	テーマ	戦後史を学び、書く	担当教官名	宮崎 章
------	------	-----	-----------	-------	------

1 テーマ設定のねらいと目標

敗戦後50年の歳月が過ぎ、若い世代にとっては、占領期も1960年代も、1970年代でさえも過去のできごとのひとつにすぎなくなったのかもしれない。そうした戦後の歴史は、新憲法のもと、国民が主権者となり、歴史を担う中心として活躍できるようになった時代である。

中1・中2の歴史の授業では十分には触れられなかったそうした戦後史について、関心のあるテーマについて自分で調べたり、共通のテキストを読んだりしながら、まず基本的な流れを学び、そのうえで長い休みを利用して、祖父母、父母、教師、近所のおじさんなど、この50年を生きてきた身近な人に聞き書き（インタビュー）を行い、それに年表や脚注をつけながら、自分で歴史を書く作業をさせる。それを通して、歴史を身近に感じさせ、自分自身が歴史に関わっていることを知らせたい。

2 生徒への期待と見通し

通常の1クラス40人の授業ではなかなか生徒同士で質疑を行ったり、議論をする機会がないため、15人以下の少人数という環境を生かし、できるだけ生徒が自ら発言し、議論することを求めた。

また、祖父母、父母などにインタビューをさせることで、身近な大人と歴史をめぐっての対話をし、コミュニケーションを図る機会ともさせようとした。

3 生徒の反応（特に通常の授業との違い）

小人数なので、机を円状にしてお互いの顔を見ながら、議論しやすい雰囲気にした。

前期は出席者の希望も入れ、各自の関心のあるテーマについて調べてきて報告させ、それをもとに質疑・討論を行う形をとった。歴史に関心のある生徒が多く、また積極的に発言する生徒も多く、議論が成立した。

後期は鶴見俊輔『戦後日本の大衆文化史』（岩波同時代ライブラリー）を共通のテキストとして、章ごとに発表者・コメント担当者を決めて、報告をさせ、質疑・討論を行う形をとった。しっかりと調べて充実した報告を行った者と、いい加減に済ませようとした者にわかれてしまった。後期のメンバーは自ら発言する者が少なく、順にあてて発言を求める結果となった。

レポートについては、多くの生徒が充実した内容のものを提出した。一部にあきらめてしまった者も出たのは残念であった。

4 目標の達成度

生徒のレポートの内容は以下のとおり。生徒自身で題をつけていない場合は、仮にこちらでつけておいた。かなりの分量のレポートを多くの生徒がつくりあげた。

<前期>

- A：日本の検察の戦後史～逢いたい……～（父へのインタビュー）
- B：戦争および天皇の戦争責任（祖父へのインタビュー）
- C：沖縄に暮らして（沖縄に住む祖父へのインタビュー）
- D：戦後を生きて（祖父母・両親その友人へのインタビュー）
- E：戦後の生活（教員へのインタビュー）
- F：人生の先輩たちの戦後について（祖父母へのインタビュー）
- G：庶民生活の変遷（母へのインタビュー）
- H：日本の教育史
- I：戦後日本の食糧事情（親戚の叔父さんと母へのインタビュー）
- J：関西での1950年代から60年代の暮らし（父へのインタビュー）
- K：戦後50年―戦争直後の富山を中心に―（祖母へのインタビュー）
- L：祖父の戦後50年史など（祖父へのインタビュー）

<後期>

- M：戦後日本広告史（父へのインタビュー）
- N：敗戦直後の歴史
- O：戦後の流行歌（祖父へのインタビュー）
- P：戦中から戦後の日米関係（祖父母へのインタビュー）
- Q：「三種の神器」と「3C」について（母へのインタビュー）
- R：占領下の日本（祖母へのインタビュー）
- S：オリンピックについて（祖母、母、妹へのインタビュー）
- T：戦後の経済について（祖母へのインタビュー）
- U：一人の女性の戦後史（母へのインタビュー）
- V：高度経済成長と生活（祖父母、父母へのインタビュー）
- W：戦後の歴史について

5 改善すべき点 & 6 今後の課題と展望

戦後史といっても範囲が広い。質疑・討論を十分に経験させるためには、テーマをしぼって、参加者が共通の基礎知識を得ながら、そのテーマに接近していくことが適当だろう。各自の関心を優先させると、本人は強い関心をもっているが、他の参加者は中学生の場合、その話題に十分ついていけないこともある。後期は共通テキストを使ってみたが、生徒にとって最適なテキストだったかどうか。またインタビュー課題を重要なものと位置づけたが、それは休みを利用して自分で取り組まねばならないため、身近な人とのコミュニケーションとしては大きな意味があったと思うが、生徒にとって負担も大きかったようである。また授業時間との連関がむずかしかった。

1 テーマ設定のねらいと目標

戦後50年を経過して日本社会は大きな変化を遂げた。この間、産業構造の変化だけを眺めれば、第1次産業分野から第2次産業分野や第3次産業分野へと、大きく就業人口は変わった。農業への新規学卒者は年間1700人と、かつて圧倒的な労働人口を吸収していた産業の面影は農業にはもはやない。農業ばかりではなく、戦後50年の間に企業間の再編が激しく進行した。国民経済の枠組の中で思考していた経済感覚は過去のものとなり、ポードレス経済の進行は、ワールド・エコノミーへと実態経済を導いていることは疑いない。個々人の意識も確実に変わり、「家」「村」などで構成されていた血縁・地縁社会は失われ、「会社」を核に構成される機能社会が出現し、個人意識は共同体的なものを見方を亡くし、一層の細分化へと駆られている。共同体意識の喪失と個人化への融解は、言わば市民と市民の連帯によって形成される「市民社会」とは違う「個人化社会」の到来を日本社会に感じさせる。家族の絆も質的な変化を遂げ、戦後社会を支えてきたものの変質が目に見える形で現われている。このような変貌が何故もたらされたのか、しかも、日本を取り巻く国際関係のドラスチックな変化は、戦後日本社会をこの先どのようなものへと導いていくのか、興味あるテーマとなっている。

以上のようなテーマ設定の理由に基づき、まず現在がどのような時代であるのか経済的な側面からの理解を深めるために、「戦後の日本経済」（橋本寿郎著 岩波新書）の読書会から始めることにした。この本の、序「私の経験から見た戦後経済」、1章「日本経済はいま」、2章「敗戦から復興」、3章「飛躍的な経済成長」、4章「経済大国と経済成長のコスト」を生徒に選ばせて、レポートで発表させることにより、「今」が一体どのようなようにしてやってきたのかを、経済面から探らせることとした。次に各自に基本的には既に決まっているテーマを選択させ、戦後社会の変貌を跡づけさせることとした。

- 1) 戦後犯罪の特色と変化
- 2) 流行歌に見る戦後社会の変遷史
- 3) テレビに見る戦後社会の歩み
- 4) 戦後農村社会の変化
- 5) 戦後男と女の取り結ぶ関係変遷史
- ※6) 労働運動から見た戦後社会の変遷史
- ※7) マンガから見た戦後社会の変遷史

※印は生徒が独自に選んだもの

以上のテーマ設定の理由として、この50年の戦後世界の変化を、「共同体意識の崩壊と個人化」をキー・ワードとして確認していく。しかもそのことにより、「今」という時代が何なのかを、そして自分という現象が何なのかを探り出していくことが出来ればと考えている。

戦後50年の歴史の中で90年代に入り、戦後社会の大きな質的な変貌が姿を現してきた。着実に戦後社会が醸成してきたものではあるが、その変化は急激であった。国際関係構造の劇的な変化に誘因があることは否めないが、やはり、戦後日本を支えてきたものが大きくその質を変えたのは間違いない。血縁的・地縁的な共同体意識を母体として発展してきた日本社会に大きな変質が訪れ、それに対して旧来の枠組、企業中心社会や官僚システムではなかなか対応することが困難になってきた点などを挙げる事が出来るであろう。

このテーマ学習では「共同体意識の崩壊と個人化の進行が日本社会にどのような変質を与えているのか」実証してもらいたいと考えている

2 生徒への期待と見通し

価値観の相対化、多様な個性、情報化、個人化などの現代社会への浸透は、現代に

生きる多くの者達を波間を彷徨する筏にさえ思わせる。それは漂流する社会とも言える。ヒーリング（癒し）の音楽が流行するのが何故なのか、その答えを見いだすのはそれ程困難なことではない。或る児童文学者は、ある日火の付いた紙の束が投げ込まれるのを恐れて、郵便受けを小さくした。規範の喪失と個人の主張が重なる時、個性は行き先を失い暴走を始める。

昨年度に引き続き、今年度もまた、今という現象が何なのか、今生きている自分たちが何なのか、自分たちは何故そう思うのか、そのような問題意識に基づいて、生徒各自がテーマの選択と問題の設定を行なってくればと期待した。生徒は各自のテーマに基づき資料の收拾と整理を行い、その中で、問題解決のための方法と自分の存在意義への確信を掴んでくれるだろうと考えた。

3 生徒の反応

昨年度との比較で言えば、より安易なテーマ設定に流れる傾向が見えた。その分、レポート内容に不十分なものがあつた。もっとも労働運動を取り上げたものなど、いくつものものに出色とも言えるものがあつた。しかしながら全体的には、強い意欲を以て課題に取り組む姿勢にはやや欠けていた感は否めなかつた。どのような社会問題意識を持ち課題に取り組めば良いのか、そのこと自体よく分からないのではないのかという思いを強くした。

4 目標の達成度

当初カリキュラムの中で計画していた、読書会による発表やテーマ発表及びレポート集の作成などは順調に行なえたが、内容的な課題である、「今という現象が何なのか、今生きている自分たちが何なのか、自分たちは何故そう思うのか」や「共同意識の喪失から個人化の誕生」に関する内省的考察に関しては現実化できなかった。年令的に課題の設定に無理があるせいかもしれないが、既成の概念から思考することに慣れている生徒にとって、今の自分という現象がなんであるのか捉え返すのは、かなり困難なことなのかもしれない。昨年度と同じ感想となった。

5 改善すべき点

テーマを設定する際、何が論証できるのかを徹底することが、各テーマに臨む上で非常に重要なポイントになると考えているが、興味本位に流れた感は否めず、そのために本論におけるテーマの追求が曖昧になってしまっていた。また発表に際して生徒が積極的に参加していく姿勢をどのようにつくっていくのか、課題として残った。

6 今後の展望

昨年度に引き続き、同じテーマの学習となったが、同じ様な課題を残す結果となった。つまり、生きる意味とは何か、何故社会は存在しどのように変化していくのか、自分とは何なのか、など多様な問い掛けの中でそれぞれがそれぞれの解答を見いだしていくことを期待したが、なかなか困難な疑問のままに残ってしまった。共通なテーマ設定を通して、もっと具体的な場面から考え、模索していく必要性を痛感し、またそのような試みを今後は展開したいと思っている。

講座記号	97-D	テーマ	環境問題に取り組む	担当者名	大野 新
------	------	-----	-----------	------	------

1 テーマ設定のねらいと目標

環境問題への意識がたかまる中で、社会科教育においても環境問題を取り上げる機会が多くなっている。中学校の地理的分野では、地誌学習の一環として環境問題を扱ってきた。しかし、環境問題の深刻さが授業の場で理解できても、自分たちの生活に結びつけて考えているとはいいがたい日常の生活がある。

その具体的なものがゴミ問題である。とくに首都東京で生活する者にとって廃棄物問題は深刻である。地理の授業の中でも23区の廃棄物が集まる東京湾海面処分場や、多摩地域の処分場である日の出町を扱ってきた。刻一刻と処分場が埋められていく状況を理解し、処分場の安全性が問題だと理解できても、学校のゴミ箱の分別状況は悪く量も減少しない。

そこで、この講座では校内のゴミから出発して、視野を拡大していくことを目的とした。具体的には校内のゴミ処理の流れを追い、最終的には東京都のゴミ処理の最新状況を把握することである。加えてリサイクルの動きや産業廃棄物の処理問題についても調べていくことを目的とした。つまり、総合的に廃棄物処理問題をとらえることが本講座の目的である。

2 生徒への期待と見通し

最も重要な点は足元のゴミ問題の実態を把握し、記録することである。生徒は日常的に週番活動でゴミの回収・分別を行っている。したがって量や内容を記録していくことはできるであろうと思われた。さらに学校の不燃ゴミを回収している業者への聞き取り、可燃ゴミを収集している清掃工場の見学などを行い、問題関心が高まることを期待した。そして、自らが企画立案する形で、「ゴミ白書」をまとめることを最終的な目標とした。これはかつて東大附属中学校のボランティアが編纂した「ゴミ白書」にヒントを得ている。

この白書をまとめることで、現状を記録し、さらに考察から学校のゴミ問題を解決していく具体的な方策が提示できると考えた。

3 生徒の反応（特に通常の授業との違い）

授業は、校外での見学・専門家からの聞き取り・入門書の輪読の3つの形式を取り混ぜて実施した。それぞれ通常の授業と異なる内容で、特に見学と聞き取りは非常に熱心に取り組んだ。清掃工場の見学や専門家からの聞き取りでは、質問が積極的に出て時間が不足するほどであった。

さらに白書の執筆活動についても概ね積極的で、分担をスムーズにこなすことができた。しかし、資料はこちらから与えたものが多く、自ら資料収集する者は少数であった。

4 目標の達成度

半期のみを設定だったため、比較対照する例がなく主観的な評価となる。最終的にまとまった「筑駒ゴミ白書」は以下の構成となった。

1. 筑駒のゴミ (1)ゴミ調査と生徒の意識 (2)ゴミの処理方法と費用
(3)ゴミの行方
2. 学校からつながるゴミ問題 (1)筑駒近辺のゴミと区の取り組み
(2)広い目でみて(日本や海外のゴミ処理)
3. 低環境負荷で持続可能な社会・学校をめざして (学校や社会への提言)

1と2について生徒は4～5人のグループで分担執筆した。それを読む限りでは、今回のテーマ設定の目標は概ね達成されたように思える。授業で扱った見学や聞き取りの内容も白書には適宜盛り込まれており、自分たちの問題意識へ結びつけたことがわかる。また、ゴミの量調査や、生徒対象のアンケートなど白書をまとめていく上で必要なデータも新たに収集することができた。

しかし、受講した生徒全員が等しくこの問題を受け止めたかどうかは不明である。それは白書の編集過程で特定の生徒に仕事が集中したことからもわかる。また、最後の提言部分も全員で話し合う時間が確保できなかったため、共通の見解とは言いがたい。その点で今後課題を残している。

5 改善すべき点

3で述べたように3つのプログラムを取り混ぜて授業を進めたが、生徒の理解度が段階的にあがっていくようなものでは必ずしもなかった。聞き取りや見学の場合は双方の都合がどうしてもあり、こちらの思惑通りには進められなかった。

最もうまくいかなかったのは、岩波ブックレット「ごみ問題をどうするか」の輪読である。授業が始まってから出版されたこの本は廃棄物問題の入門書として最適だったが、担当を決め、レジュメをつくり発表する形式が定着しなかった。生徒にもこれは不評であった。やはり、輪読のモデルを示し、指導していくことが必要である。

また、白書の内容検討も作業の遅れもあって十分にできなかった。本来は執筆の進んでいく過程で原稿を相互に検討する予定だったが、時間が不足していた。結局班員が分担執筆したものを編集担当がまとめて印刷する形となった。

以上の点から、通常2時間の内容構成についてさらに検討する余地が残っていると思われる。

6 今後の展望

今後は白書の成果をどのように広げていくかがまず問われている。また、廃棄物を授業で扱う上で、廃棄物行政などについてさらに調査を進め、今後の授業に備えていきたい。生徒については、高校進学後、どのように廃棄物問題に取り組むかを見守っていきたい。

講座番号	97-E	テーマ	数学を創ってみよう	担当教官名	駒野 誠
------	------	-----	-----------	-------	------

1. テーマ設定のねらいと目標

生徒は数学の問題が解けたとき、その喜びに感動する。

一方、数学は与えられた問題をあるいくつかの定型的解法によって解決するという演繹的・論理的な学習に終始するイメージを持っているようである。そこで、数学は帰納的な手法によって、ある仮説を立て、ひとつの数学を創っていくものという勉強法を味あわせてやりたい。そのことにより自分なりの小さな数学を創る喜びをもってもらうことがテーマ設定のねらいである。

約13回のテーマ学習のうち約9回は、担当者から課題を与えて考えさせる。それを、班分けした生徒の中で協力して課題を解決していく。それを黒板の前に出て発表し討論していく。また、夏期休業中を活用し、自分の研究テーマを見出し研究してもらう。残る3回を中間発表、論文発表会に充てる。最終的には各班でテーマを見出し、研究レポートを作成し、発表することにある。その研究の方法を学ぶのがテーマ学習の日常的な課題研究である。

2. 生徒への期待と見通し

問題を解決する過程が、個人によるものと、他との協力によるものと、どんな風に異なるのが実感してもらう。現在今後とも、高度な科学技術・テクノロジー社会においては個人だけでは仕事ができない状態である。

他者と意見・発想を交わす事で、そのグループ内の誰もが抱いていなかった新しい事が発芽することが多い。それを期待し共同研究をするのである。それによる感動を体験してもらう。

また、生徒から積極的に問題意識をもって課題を提出することも期待する。自由に発言できる場と雰囲気をつくり、お互いに意見がスパイラルに回転して盛り上がるのがこのテーマ学習の前提でもある。また、他者への伝達も情報化社会に於いては重要であることから、発表という場も重視していく。生徒には、その個人の持っている発想・アイデアなどで個性を発揮してもらいたいと期待している。与える課題さえgoodであれば、達成できると考えている。

3. 生徒の反応(通常の授業との違い)

通常の授業との大きな違い

- ・一つのテーマ(課題について)を時間をかけて研究することができること
 - ・自分が選んだ研究内容を発表して仲間聞いてもらい評価してもらえること
 - ・一般化や実験に時間を十分割くことができること
 - ・班構成による協同研究であること
 - ・生徒も数学の成績とは無関係であるので、気楽に取り組める。
- 与える課題は、解法がすぐに分かってしまう問題ではない。そこから問題を構成・解析することが中心である。

4. 目標の達成度

各班(個人の研究もある)が次のような論文を書いた。

- ①Mathematics And Criptography(1班:暗号と数学), ②ボナッチの世界(2班:フィボナッチ数列の拡張), ③この馬に賭ける(5班の一部:確率の研究), ④じゃんけんにおける共犯の意味(3班個人:確率の応用), ⑤ $f(x) = x^n + 1$ について(4班:素数の研究), ⑥100連勝をめざせ、ひまつぶし(5班の一部:ゲームの研究), ⑦ \sqrt{x} の近似解の求め方(3班個人: $\sqrt{2}$ を1万6千桁求めた), ⑧それとなしに足してみたら(3班個人:乱数の不思議な性質)
- 多くは全く独創的な論文である。評価したい。

5. 改善すべき点

生徒からの課題も募ったがほとんど出なかったことが今後の大きな改善点であり、これをどう指導するのが大きな問題点でもある。しかし、こちらにとってもgoodな課題を毎週与えるのも大変な事なので確かに難しい事ではある。日常的に数学が生きて働く姿をみたい欲求がある。まずは、調べたり・実験したりをもっと多く導入する事が課題発見のkeyであると思われる。

6. 今後の展望

'96年度の反省から、模型作り(小立方体による長方形充填でしかも立方体充填のパズル)なども導入した。これは好評であった。今後も、調査(図書から)・実験(グラフ電卓、パソコンでのシミュレーションも含め)など紙と鉛筆のみでない数学を提供するよう課題開発を進めたい。また、班による研究活動を多く入れた事は、途中で諦めずに解決していくという成果があった。研究成果を後輩にも聞かせる機会があれば継続・発展がより強くなると考える。

講座記号	98-F	テーマ	ガリレオを読む	担当教官	井上正允
------	------	-----	---------	------	------

1 テーマ設定のねらいと目標

現行の指導要領では、数学史・科学史に触れる機会はほとんどない。現在授業で扱われている問題や内容が、長い人間の歴史の中で生み出されてきたもので、あらためてそれらが生み出された背景を探り、作り出された過程をたどることをねらいとした。

中3生を対象とすることを考えて1次関数、2次関数とのつながりから「等速度運動」「等加速度運動」を中心に据え、ガリレオ・ガリレイの『新科学対話』下巻第3日岩波文庫（絶版であったためコピー）とS・G・ギンディキン『ガリレイの17世紀』シュプリンガー・フェアラーク東京の2冊をテキストに選びそれを輪読、レポートしながら、上記のねらいに迫ろうとした。

2 生徒への期待と見通し

テキスト（初版）は戦前に出版されたもので必ずしも読みやすいものではない。しかし、多くの生徒はこの講座を選んで受講する生徒であり担当箇所のレポート発表だけでなく、補助資料を使った講義をはさんだり、物理の教師の応援を要請したり、実験を取り入れたりすることで、何とか彼らの興味や関心を引き起こし、持続的な追求心を掘り起こすことを期待した。

3 生徒の反応（特に通常の授業との違い）

生徒には2節から3節程度（文庫ページ数にして8から10ページ）を割り当て、内容整理とガリレオの方法を中心にレポートしてもらったよく読み込んできている生徒とそうでない生徒の発表能力の差は大きい。2で述べたように、文語体の文章で、比例式や相似を駆使してのまわりくどい定理証明は必ずしも生徒の感性にフィットするものではなく発表に苦勞している生徒も多かった。

この本は、アリストテレスの運動論を唱える者とこれを信奉する者と

それらを批判して新しい運動論をうち立てようとするガリレオの代弁者3人の対話を挟みながら、議論が展開されてゆく。16から17世紀における時代の雰囲気や問題がいささかでも感じ取れたのではないか。

4 目標の達成度

通常の数学の授業と数学史や科学史を扱う授業はかなり様相を異にする。「数学が好きである」「科学に興味・関心がある」生徒であっても、これらが生み出され時代背景や思想的基盤がはっきりしていないところでは効果は出せない。

授業担当者の準備不足は否めないし、本読みに入る前に3～4時間程度の講義で時代背景、思想的基盤、「君たちに何をつかみ取ってほしいのか」を徹底させておけば良かった。

子ども達にとっても担当者にとっても不満の残る講座であった。

5 改善すべき点 / 6 今後の課題と展望

今回は物理の濱本先生の協力を得て、ビデオ視聴、慣性の法則や斜面落下の実験を取り入れたが、こういうスタイルはもっと考えられていい。16～17世紀の時代背景や思想的基盤については世界史の先生の協力を願って講義していただくことも考えられる。

12～13回の内容を本読み・レポート中心にすすめるのではなく、講義・ビデオ・実験・討論などを多面的に計画に組み込んで展開したい。子ども達に担当させる箇所も少し絞り込んだ方がよい。

こうすることで、テーマ学習も「総合的な学習」になりうる。

1. テーマ設定のねらいと目標

現行の学習指導要領より「地層を作る岩石とその中の化石などを手がかりとして過去の環境と年代を推定すること」と化石の役割を重視した方向に手直しされた。化石というと、みんな恐竜やアンモナイトを想像しがちであるが、実際日本で多量に産出する大型化石は、貝類化石なのである。特に、関東地方南部は氷河性海面変動に伴う更新統の海成層がよく発達し、その中に寒流系および暖流系の貝化石が多産する。理科の本質はまず実際の現象や実物から学ぶことであり、テーマ「地球探検」は化石という実物からどれだけの情報が引出せるかということが一つのねらいとなっている。そして何よりも「保存の良い化石をたくさん採る」というような理科本来の楽しさを味わってもらいたい。

今回、千葉県北部に分布する下総層群より貝化石を生徒に採集させた（採集地は前期が印旛郡印旛村岩井戸、後期が千葉縣市原市瀬又）。採集した化石は学校に持ち帰って、きれいにクリーニングした後、鑑定・分類を行なう。ほとんど現生種なので、図鑑を利用すればだいたい鑑定できる。標本はきちんと整理箱に入れて、ラベルを添える。次に地層から産出する化石からどのようなことがわかるか、あるいは推定できるかということを考えさせるために、まず採集した貝の種類のリストを作成する。貝は底生動物なので、気候（水温）や生息深度など地層が堆積した環境を復元するのに役に立つ示相化石になりうる。そこで縦軸に貝の種名、横軸に貝が現在分布している緯度や生息深度をとったグラフを生徒に書かせる。全ての貝に共通する生息範囲や深度から貝の堆積した環境を明らかにし、現在のどのような場所に相当するのか考察させる。また採集した貝について、種類ごとに計測を行ない、表を作成する。その表をもとに、グラフを書いて相対成長の考察をしたり、統計処理をして2つの計測値の相関係数を求めたりする。さらにいくつかの形質をもとに種の個体変異の幅を調べて、生物種は形質によってどのように分類されているかを知る。

次に体化石だけでなく、印象化石も扱う。シリコンラバーを利用してモデリングを行ない、模型標本を制作する。また貝化石をクリーニングした後の砂から実体顕微鏡で底生有孔虫を探し出して、貝化石による環境推定と比較する。

一方、現行の学習指導要領からは除かれている変成岩を主とする岩石標本の採集を埼玉県秩父郡長湊町の荒川沿いの河原で行なった。ここでは20種類以上の岩石を採集できることから、地球の覗き窓として位置付けられ、「地球探検」のもう一つのねらいとなっている。まず、採集した岩石の種類を調べさせ、縦軸に岩石の形成された年代、横軸に岩石の種類をとったグラフを書かせる。すると、この地域がかつて沈み込み帯のどのような構造的な配置にあったのかを推定することが可能になる。また、採集した岩石を切断・研磨し、岩石標本のコレクションを作ったり、岩石薄片を作成して鉱物の同定を行ったりする。

2. 生徒への期待と見通し

野外で地層から化石を採るという作業は生徒のほとんどが未経験である。そこでまず素朴な感動が得られると予想した。また、最近の恐竜ブームやNHKのプログラムなどで化石に対する興味や関心が多少なりともあると期待した。また物（化石）さえあれば、生徒のイマジネーションがはたらくと考えた。

一方、岩石の採集は生徒のほとんどがこれまで経験しているはずである。しかし、これだけの種類の岩石を採集する経験はなかつただろうし、岩石を研磨した後の切断面の美しさや、岩石薄片を偏光顕微鏡で観察した時の鉱物結晶の色彩変化は、少なからず生徒の興味・関心を引くと考えた。

3. 生徒の反応（特に通常の授業との違い）

化石の採集は第2土曜日を利用して行ったが、全員夢中になって採集した。同じ種類の貝をたくさん集める者、いろいろな種類の貝を集める者、大きな貝を集める者など生徒によって好みの差があるのが面白い。岩石の採集は主に日曜日に行なったが、河原での岩石の採集は単調で、集中力が今一つであった。教室での化石のクリーニングや岩石薄片の研磨は、通常の授業と違って作業中心なので、それぞれ自分のペースに合わせてよく取り組んでいた。一方、化石の計測や統計処理はそれぞれきちんとかなしたが、それだけに留まった。

4. 目標の達成度

一連の課程を通して、化石に対する研究方法について一通り学んだことになる。また、実物に接することで、化石の役割やその意義を理解する上で、教科書や他のメディアよりも大きく役立ったと思われる。一方、岩石に対する研究方法という点では、まず肉眼で大きく種類を判別し、次に偏光顕微鏡による鉱物の同定から、最終的に岩石名が決まることは理解してもらえたと考える。

5. 改善すべき点

化石採集地の選定には、文献調査と下見で準備に時間とお金がかかった。しかし、その採集地でたくさん良い化石が採れれば、後の作業は極めて順調に進む。ただし、化石のクリーニングに時間を取られると、課程のすべてを終了できないので、作業量をよくチェックしなければならない。さらに、生徒によって採集した化石の量に違いがあると、個人個人の作業進度がまちまちになるので、早く作業を終えてしまった生徒に対する対応が充分でなかった。

一方、岩石標本の採集地は固定しているので、直前に現場の状況をチェックし、まとめとして立ち寄る埼玉県立自然史博物館の見学の予約をするだけで良いが、岩石薄片の作成で岩石研磨機が一つしかなく、能率が非常に悪かった。

講座記号	97-H	テーマ	スポーツトレーニング	担当教官	合田浩二
------	------	-----	------------	------	------

1.テーマ設定のねらいと目標

本校入学生の体力・運動能力は、全国平均値と比較した場合、かなり劣る傾向にある。しかし、体育実技やクラブ活動への参加により、中学3年時にはTスコアのうえではほぼ全国平均の水準まで到達する。

この講座では、成長期に自然に伸びていく体力・運動能力が適切なトレーニングによってさらにアップすることを理解させ、生徒が自分の特性に合わせたトレーニングプログラムを作成、実行、評価しながら、伸ばした体力をさまざまなスポーツ種目の競技力に反映させることを目標とした。

2.生徒への期待と見通し

- ① 自分の競技種目ではどのような体力要素を重要視しているか
- ② 自分の体力特性の自己分析
- ③ ①と②の隔たりを埋めるための方法
- ④ トレーニング方法・手段の理解と習得
- ⑤ ③の具体的な手段（プログラム化）
- ⑥ ⑤の実行と評価

科学的な理論に裏付けされた個々のトレーニング方法をどのようにプログラムすれば、自分が得意とするスポーツ種目に効果が得られるのか、自己分析を試みることができるようになることを期待した。

3.生徒の反応

トレーニング種目は基本的なものを中心に、特に基本動作の習得をめざした。「しゃがんで、立つ動作」（スクワット）が生徒にとっては意外に難しく、鏡を見ながら自分で確認する場面が多く見られた。

運動欲求の高い生徒が受講していることもあり、プログラムを積極的に消化した。

4.目標の達成度

積極的にトレーニングに取り組む姿勢は十分評価できる。しかし、半数以上の生徒が、自分自身でプログラムを立てるところまでは行っても、それをどう評価するかについては、客観的な見方をするまでには至らなかった。

5.改善すべき点

自己評価についての方法、理論と実践を結び付ける方法、生徒が主体的に学習する態度の形成について、一昨年度よりは改善が見られたが、一部意欲の低い生徒においては形式を追うのみにとどまった。

6.今後の展望

生徒は、他人から評価されることに慣らされて成長してきた。自分で自分の学習（ここでは運動学習／トレーニング）について自己評価を下す場にできなかった。テーマ学習では、「教える」「教えられる」の関係ではなく、お互いが学びあう関係を築いていきたい。

7.追記

93,95,97年度と、テーマ学習を3回担当し、そのなかで感じたことのひとつに、「生徒から提出されたレポートの仕上がり具合は、生徒個人の学習への取り組み方が反映したものである」ことが挙げられる。学習テーマを個人、あるいはグループで設定し、学習の成果を発表するまでの手だては、現在のところ各講座の担当者に任されているし、各教科で課題をまとめる際に教授されてもいる。しかし、生徒にとっては「社会のレポートのまとめ方」「理科のレポートのまとめ方」という捕え方しかできていないのではないか。

『情報の収集・整理の方法』については、本来は司書教諭が担当すべきものであろうが、本校での取り組み方を見直す時期に来ていると思う。

講座記号	97-1	テーマ	絵巻物をつくろう	担当教官	土井宏之
------	------	-----	----------	------	------

1, テーマ設定ねらいと目標

本講座のねらいは、毛筆による絵画制作という純粋に美術的な学習の達成と、美術の学習に他教科の内容を取り込むという合科的学習を目指すところにある。ここでは、特に後者のねらいについて述べたい。

絵画の学習において、その題材が構想画のように、生徒各人がすべてを考えて表現しようとする場合、設定されるテーマ、内容には生徒が普段興味を持っていること、気にかけていることを取り上げられるのが普通である。その場合、それが非常に個人的な内容であったり、空想的なものであったりすることも多い。純粋に美術の学習であればそれでよいのであるが、合科的な学習にしたいと考えた場合、他教科で得られた知識、考えをどのように取り上げさせ、美術の表現として実らせるかということが重要となる。しかし本講座は、美術の教師一人が担当するため、授業のなかで他教科の内容を学習するのは困難である。単なる生徒の想像や中途半端な知識でない、事実に基づいた内容とするために、他教科での事前の学習の引き出し方がポイントとなる。主題設定の段階で各生徒に、その設定理由、根拠となる事前の他教科での学習を報告させ、物語の内容や結論となる主張についても面談を繰り返し、以前に学習したときのノートや資料などを持参させるなどして、事実の裏づけがある内容になるよう指導する。

本年度前期の本講座のテーマ一覧のように、生徒が設定する絵巻の主題は、そのほとんどが社会問題であり、すでにそれは、理科、社会科などの合科的内容を備えている。生徒は、それらを新聞、テレビなどから情報として取り入れるとともに、それぞれの教科での学習においてより関心を高めていると考えられる。それをさらに美術において表現することにより、問題への認識を深めさせるとともに、生徒各人の主張を視覚的に表現させようとするものである。

2, 生徒への期待と見通し

事前のオリエンテーションにおいて内容を理解した上で進んで受講してきており作品制作に意欲を持っていると考えられ、中身の濃い制作とレベルの高い作品が期待できる。

3, 生徒の反応

生徒は自ら進んで受講してきており、制作意欲を持って授業に望んでいる絵巻物というなじみの薄い表現形式は、その珍しさも手伝って、生徒の興味を引いているようである。自分の興味関心の対象を物語のテーマとすることにより意欲を失わずに、半年間、積極的に制作を行った。

4, 目標の達成度

独自のストーリーによる絵巻物制作のおもしろさの体験、毛筆による表現の獲得、古典的絵画形態の理解という目標は、ほぼ達成できたと考える他教科の内容の取り込みに関しても、専門的な内容の指導は不十分ながら、可能な範囲で達成されたと考える。

5, 改善すべき点

物語の展開、細部の内容について、該当の教科によるより専門的な指導が必要であろう。

6, 今後の展望

他教科の学習内容を取り込むには、美術の教師だけでは限界があり、他教科の教員との本格的な連携が望まれる。

講座記号	97-J	テーマ：英語でコミュニケーション	担当教官名	寺田恵一
1 テーマ設定のねらいと目標				
<p>(1) 少人数の授業の特色を生かして、4技能のバランスの取れた発達をめざす。</p> <p>(ア) 聞き、話す活動として、スピーチ、ショウアンドテルとディスカッションを行う。</p> <p>(イ) 読む活動として、教材をパラグラフごとに担当者を決めて内容をまとめる。</p> <p>(ハ) 書く活動として、自由(テーマ)作文やレポートをまとめたりする。</p> <p>(2) 異文化コミュニケーションの視点から、授業と教材を編成し、生徒の異文化に対する理解と認識を高める。</p> <p>(3) (1)と関連するが、ビデオやテープ等の視聴覚教材を積極的に活用して、生徒の言語運用能力を高める。</p>				
2 生徒への期待と見通し(目標設定の理由と授業計画)				
<p>(生徒への期待)</p> <p>上記の目標を設定した理由には、次に示すような「生徒への期待」がある。</p> <p>(1) 少人数の授業なので、個々の生徒の指導をきめ細かくして、コミュニケーション能力を育成する。</p> <p>(2) 異文化への関心を高め、自国の文化の発表を行わせて、発信型の教育を目指す。</p> <p>(見通し)</p> <p>授業計画は次の通りである。</p> <p>(1) コースの概要の説明と英語による自己紹介</p> <p>(2) アメリカの行事の紹介—ロングマンの教材を利用—と発表</p> <p>(3) 日本の年中行事のレポート—各生徒は行事を一つ選び、50—100語の英語にまとめて発表した後、ライティングにまとめる。</p> <p>(4) ショウアンドテル—毎回2名の生徒が発表</p> <p>(5) アメリカンハイスクールの紹介</p> <p>(6) ビデオ教材と映画教材の活用</p> <p>(7) ディスカッション</p> <p>(8) 日本の伝統的な文化事象のレポートと発表—最終の課題</p>				
3 生徒の反応(特に通常の授業との違い)				
<p>(1) 自己紹介のスピーチやショウアンドテルのような発表活動を通して、授業に参加しているという実感を持ち、通常の授業よりもアクティブな姿勢を示している。</p> <p>(2) 日米の行事の比較などの、文化の比較に興味を示している。</p> <p>(3) 14名という少人数なので、ショウアンドテルやテーマ作文(レポート)の原稿の校正と指導に時間をかけられるので、生徒の教官に対する信頼感が増したように思われる。</p> <p>(4) 1996年度のテーマ学習よりもオーラルコミュニケーションの割合を多くしたので、生徒のコミュニケーションに対する姿勢が積極的になった。</p>				

<p>4 目標の達成度</p>
<p>(1) 4技能のバランスのとれた発達という観点から活動を振り返ってみると、読む活動と書く活動はある程度目標を達成できたと思うが、聞き、話す活動はやや物足りなかった。</p> <p>(ア) ショウアンドテルは、全員の原稿を事前に添削できたこと、パフォーマンスをVTRに録画したこと、観衆の生徒に評価を行わせたことなどが良かった。ディスカッションは数回行う予定が1度しかできず、不満足な結果に終わった。</p> <p>(イ) 読む活動(アメリカの行事)については、事前にパラグラフごとに担当者を決めておいたのは、パラグラフリーディングをするのに良かった。昨年(96年度)と異なり、数名の生徒に口頭で発表させたのは、リーディングからコミュニケーション活動に発展させたという面で評価できる。</p> <p>(ウ) 書く活動については、自由作文とレポートについて、生徒の原稿の添削を比較的丁寧にできたことが評価できる。</p> <p>(2) 異文化コミュニケーションをはかる立場から教材を収集して、一定の成果をおさめたと思われる。</p> <p>(3) ビデオやテープなどの視聴覚教材の使用は、生徒のコミュニケーションへの意欲と関心は高めたと思う。しかし、コミュニケーション能力の向上という面では、より効果的な教材を使用する必要を感じさせられた。</p>
<p>5 改善すべき点</p>
<p>(1) 生徒のコミュニケーション能力を高めるための活動を、質的にも量的にも増やすことが大切である。そのために、ビデオやテープなどの音声教材の準備、スピーチとディスカッションの系統的な指導が求められる。</p> <p>(2) アメリカの行事についてのリーディングは、事前の準備を指導してより内容を深めさせる必要を感じた。</p> <p>(3) 日本の伝統的な文化事象についての発表については、生徒に原稿を早めに用意させて、口頭発表の準備にもっと時間をかけさせるべきだった。</p>
<p>6 今後の展望</p>
<p>(1) 生徒のスピーチのモデルにするスピーチ(昨年の生徒の実践例や、アメリカの大統領の演説など)を生徒に示したり、教師のアドバイスを生徒にもっと与えて、より効果的なスピーチの指導を今後行う予定である。</p> <p>(2) アメリカの行事については、事前に担当者を決めて、教科書だけでなくそれ以外の資料(百科事典など)も幅広く参照させて、より内容を深める。</p> <p>(3) アメリカンハイスクールについては、より深く広く資料を参照させ生徒の発表活動を取り入れる。東京にあるアメリカンハイスクールとの交流を行う。</p> <p>(4) 日本の伝統的な文化事象の発表については、生徒の当日のプレゼンテーションについて、事前指導を強めることにする。</p> <p>(5) ディベートを取り入れて、生徒のコミュニケーション能力を高める活動を今後重視していく。</p> <p>(6) 外部の講師を招聘して授業を活気づける。</p>

講座記号	97-K	テーマ	本物の英語にふれよう	担当教官	鈴木文子
------	------	-----	------------	------	------

1 テーマ設定のねらいと目標

- (1) インタビューやニュースを聞き、話の概要や聞き取りのコツを学ぶ。
- (2) 世界で起こった話題をビデオで見たり、聞いたりして異国の文化や社会に触れる。
- (3) 聞いたことに対して自分の考え、感想などを英語で表現できるようにする。

2 生徒への期待と見通し（目標設定の理由と授業計画）

生徒の興味のあるインタビューやニュースをアンケートでとりそれを基に活動内容の計画を立てていく。

- (1) 本物のインタビューを聞きまた実際にインタビューも行う。
 - ①各方面の人々のインタビュー、特に生徒が興味を持っている分野のインタビューを聞く。
 - ②生徒自身がインタビューの質問を考え、日本にいる外国人にインタビューをする。
- (2) 実際のニュースを聞きまた関連記事を読む。
 - ①身近に起こったニュースから世界のニュースまで、特に生徒が興味を持てるニュースを聞く。
 - ②聞いたニュースと同じ内容のものを、実際の記事でどのように表現されているか確かめてみる。
- (3) VOA放送を利用して科学番組を聞く。番組は学習者向けに制作されているので英語の速度もゆっくりしている。生徒は聞いた内容を論理的にまとめる練習をする。
- (4) 外国の社会・文化に触れられるようなストーリー、話題をビデオや実際に書かれたものを通して聞いたり、読んだりし自分の意見・感想も表現できるようにする。

3 生徒への対応

- (1) 校外でのインタビューでは生徒が2～3人のグループになり積極的に外国人に話しかけていた。生徒自身が考えた質問が通じたことで発話に自信をもてたようだ。また録音したインタビューを教室で再度聞きインタビューの成功、失敗点を分析することで表現を確実なものにした。
- (2) ニュースは最新のものまたトピックス的なものを取りあげたので、身近に感じられ興味を持って聞けたようだ。聞いたニュースと同じ内容のものを、実際の記事でどのように表現されているか確認することで「本物に触れている」という実感を新たにしたいようだ。

4 目標の達成度

- (1) 話の概要をつかむ練習は様々な活動を通してできたが特にニュースを聞くことでその要領を理解させることができた。
- (2) 聞き取りのコツを学ぶという点では、インタビュー、ニュースともそれぞれ特有の表現や一定のパターンを理解させることで効果をあげることができた。
- (3) 異国の文化や社会に触れることは間接的ではあるが講座全体を通して行うことができた。また直接的にはアイルランド人を招いて国の紹介をしてもらったり校外での外国人へのインタビューなどで諸外国の人々と話す機会をもつことができた。
- (4) 聞いたことに対して自分の考え、感想などを英語で表現できるようにするという目標は予定していたほどは達成できなかった。聞き取りの活動にウエイトが置かれたことがその原因の1つと考えられる。

5 改善すべき点

- (1) 本来の目標が「聞く能力を伸ばす」という性質上、教師が題材を提供したり聞く要領の指示をすることになり生徒中心で研究テーマを追求するというような達成感とは与えられなかった。意識的に生徒にペア、グループ等の形で発表、討議の活動をさせたが、今後は生徒自身がその必要性を感じるような指導内容を考慮していかなければならない。
- (2) 話の概要を把握する練習では全体的な活動の中で個人差を尊重できる指導展開の工夫が必要となる。

6 今後の展望

- (1) 「本物の英語に触れる」という点では、生徒もある程度満足できるが、実際の生徒の英語力とのギャップを埋めるような指導展開と教材の開発を充実していきたい。
- (2) 中学3年生で語学的にも多く学習しなければならない段階なので、生徒中心の創造的な活動をどの程度取り入れるか検討の必要があるが、自発的な活動を促す指導を徹底していきたい。

V テーマ学習実施後のアンケート

97年度中学3年生(49期)123名について3月2日に実施したアンケート結果を集計したものである。(下線は最多回答)

1. オリエンテーションと希望調査について

(1) 4月のオリエンテーションで、実施される講座の内容は理解できましたか、

(選択するのに十分な情報は得られましたか)

- | | |
|-------------------|---------|
| ①十分に理解できた | (17.2%) |
| ② <u>かなり理解できた</u> | (45.9%) |
| ③あまり理解できなかった | (31.1%) |
| ④ほとんど理解できなかった | (5.7%) |

(2) 講座を選択するのに何を基準にしましたか。(複数回答)

- | | |
|----------------|---------|
| ① <u>興味と関心</u> | (83.6%) |
| ②得意な分野だから | (15.6%) |
| ③不得意な分野だから | (9.8%) |
| ④担当教師 | (13.9%) |
| ⑤友人が選択するから | (9.0%) |

(3) 講座を選択する際、誰の意見を参考にしましたか。(複数回答)

- | | |
|-------------------|---------|
| ① <u>自分一人で決めた</u> | (78.7%) |
| ②教師に相談した | (0.8%) |
| ③親(兄弟も)に相談した | (6.6%) |
| ④友人に相談した | (18.9%) |

(4) 講座を選択する際、迷いましたか。

- | | |
|-------------------------|---------|
| ①2つとも迷わず即決した | (34.4%) |
| ② <u>1つは即決、もう一つは迷った</u> | (54.1%) |
| ③2つとも迷った | (11.5%) |

(5) 選択の決定の方法に不満はありますか。

- | | |
|-------------|---------|
| ①ある | (23.0%) |
| ② <u>ない</u> | (77.0%) |

Q1 選択の決定について要望がありましたら、その点を書いて下さい。

- ・第一、第二希望を重視し、第四希望は採用しないでほしい(7)
- ・前後期を別々に希望調査してほしい(後期は前期のようすをみて決めたい)(3)

- ・定員をつくらないでほしい (3)
- ・オリエンテーションでくわしい内容を説明してほしい (2)
- ・希望の少ない講座は開講しないでほしい (2)
- ・科目数をふやしてほしい (2)
- ・選択方法を事前に公開してほしい
- ・いったん希望調査をしてほしい

2. 授業時間 (火曜の5・6校時) の学習について

(6) 授業時間では、自分の能力を発揮することができましたか。

- ①通常の授業以上 (20.5%)
- ②通常の授業と同程度 (62.3%)
- ③通常の授業以下 (16.4%)

(7) 授業時間では、教師から多く学ぶことができましたか。

- ①通常の授業以上 (45.9%)
- ②通常の授業と同程度 (42.6%)
- ③通常の授業以下 (11.5%)

(8) 授業時間では、友人から多く学ぶことができましたか。

- ①通常の授業以上 (40.2%)
- ②通常の授業と同程度 (48.4%)
- ③通常の授業以下 (10.7%)

(9) 授業時間ではどのような形態がとられましたか。(複数回答)

- ①教師の講義 (51.6%) 63名
- ②書物・文献の検討 (49.2%) 60名
- ③実験・観察・作業 (25.4%) 31名
- ④実演・演技 (31.1%) 38名
- ⑤フィールドワーク (42.6%) 52名
- ⑥レポートや作品の製作 (58.2%) 71名

(10) (9) ①「教師の講義」について、(63名について、複数回答)

- ①積極的に参加した (17.2%)
- ②「自主的に探究している」と感じた (6.6%)
- ③興味や関心がさらに高まった (17.2%)
- ④負担に感じた (11.5%)

(11) (9) ②「書物・文献の検討」について、(60名について、複数回答)

- ①積極的に参加した (26.2%)
- ②「自主的に探究している」と感じた (17.2%)

③興味や関心がさらに高まった (19.7%)

④負担に感じた (27.0%)

(12) (9) ③「実験・観察・作業」について、(31名について、複数回答)

①積極的に参加した (19.7%)

②「自主的に探究している」と感じた (9.0%)

③興味や関心がさらに高まった (12.3%)

④負担に感じた (3.3%)

(13) (9) ④「実演・演技」について、(38名について、複数回答)

①積極的に参加した (21.3%)

②「自主的に探究している」と感じた (15.6%)

③興味や関心がさらに高まった (18.9%)

④負担に感じた (7.4%)

(14) (9) ⑤「フィールドワーク」について、(52名について、複数回答)

①積極的に参加した (29.5%)

②「自主的に探究している」と感じた (23.8%)

③興味や関心がさらに高まった (22.1%)

④負担に感じた (7.4%)

(15) (9) ⑥「レポートや作品の製作」について、(71名について、複数回答)

①積極的に参加した (33.6%)

②「自主的に探究している」と感じた (33.6%)

③興味や関心がさらに高まった (20.5%)

④負担に感じた (35.2%)

(16) 授業時間を待ち遠しく思いましたか。

①通常の授業以上に待ち遠しかった (27.0%)

②通常の授業と同程度 (63.1%)

③通常の授業よりも苦痛であった (9.8%)

Q2 授業のやり方について要望がありましたら、その点を書いて下さい。

- ・実技・実験・フィールドワークをもっと多くやりたい (6)
- ・授業を計画的に手際よく、十分に準備してほしい (3)
- ・ビデオばかりみたくない (3)
- ・授業時数をもっと多くしてほしい (3)
- ・講義が多かった (2)
- ・外国人を入れてほしい (2)

- ・討論がもっとしたかった (2)
- ・講義を多めにしてほしい (1)
- ・授業が長い
- ・発表主体の授業がよい

3. 授業時間外の学習について

(17) 授業時間外でも積極的に取り組みましたか。

- ①通常の授業以上 (35.2%)
- ②通常の授業と同程度 (53.3%)
- ③通常の授業以下 (8.2%)

(18) 授業時間以外では誰と学習しましたか。

- ①自分一人 (53.3%)
- ②教師と共に (4.1%)
- ③友人と共に (43.4%)

(19) 授業時間以外では、どのような学習をしましたか。(複数回答)

- ①講義の復習 (8.2%)
- ②読書や文献の検討 (39.3%)
- ③独自に実験・観察・作業 (3.3%)
- ④独自に実演・演技 (13.1%)
- ⑤独自にフィールドワーク (8.2%)
- ⑥レポートや作品の製作 (45.1%)

Q3 授業時間外の学習について要望がありましたら、その点を書いて下さい。

- ・レポートの負担を減らしてほしい (8)
- ・レポートに使える文献が少ない

4. 研究成果の発表について

(20) 研究成果の発表はどのようにして行われましたか。(複数回答)

- ①それぞれの授業ごとに (39.3%) 48名
- ②最後に作品・レポート・発表などの形式で (71.3%) 87名

(21) (20) で①に○をつけた人 (48名) は、その成果と負担についてどう思いますか。

- ①成果はあり、負担は感じなかった (13.9%)
- ②成果はあったが、負担も大きかった (23.0%)
- ③成果はなく、負担も感じなかった (2.5%)

④成果はなく、負担だけが大きかった (7.4%)

(22) (20) で②に○をつけた人 (87名) は、その成果と負担についてどう思いますか。

①成果はあり、負担は感じなかった (23.8%)

②成果はあったが、負担も大きかった (37.7%)

③成果はなく、負担も感じなかった (3.3%)

④成果はなく、負担だけが大きかった (4.9%)

5. 後期の講座全般について

(23) テーマに対して、主体的に探究することができましたか。

①通常の授業以上 (53.3%)

②通常の授業と同程度 (39.3%)

③通常の授業以下 (7.4%)

(24) 受講前に比べて、テーマに対する興味や関心は高まりましたか。

①受講前より高まった (70.5%)

②受講前と同程度 (23.0%)

③受講前より低下した (6.6%)

(25) 学習面の成果と負担について、どう思いますか。

①成果はあり、負担は感じなかった (37.7%)

②成果はあったが、負担も大きかった (48.4%)

③成果はなく、負担も感じなかった (6.6%)

④成果はなく、負担だけが大きかった (6.6%)

Q 4 後期の講座全般について要望がありましたら、その点を書いて下さい。

- ・前期と後期に同じ科目を設定してほしい (3)
- ・受講者数をふやしてほしい (2)
- ・より専門的な内容を望む (2)
- ・もっとテーマをはっきりさせてほしい (2)
- ・もっとやさしい内容がよい
- ・オリエンテーションの説明と内容が異なっていた
- ・発表ばかりでおもしろくなかった
- ・全体的にだらけていた
- ・もう少し時間をふやしてほしい

6. 後期の講座の取り組みについて

(26) 前期の講座と比較して、学習する姿勢は変わりましたか。

- ①前期より積極的 (32.8%) 40名
- ②前期と同程度 (44.3%) 54名
- ③前期より消極的 (20.5%) 25名

(27) (26) で①に○をつけた人 (40名) は、その理由は何ですか。

- ①前期の講座より興味や関心があるから (25.4%)
- ②前期の講座を通じて、テーマ学習の成果が期待できるようになったから (7.4%)
- ③前期の講座を通じて学習面の負担が小さいと感じたから (0%)

(28) (26) で③に○をつけた人 (25名) は、その理由は何ですか。

- ①前期の講座より興味や関心がないから (13.9%)
- ②前期の講座を通じて、テーマ学習の成果が期待できなくなったから (7.4%)
- ③前期の講座を通じて学習面の負担が大きと感じたから (0.8%)

7. テーマ学習と将来の進路との関連について

(29) 受講後に将来そのテーマに関係ある方面に進みたいと思うようになりましたか。

- ①さらに興味が深まり高校や大学でその分野の勉強をしてみたいと思った (9.8%)
- ②どちらともいえない (受講前と変わらない) (82.0%)
- ③自分には向いていないことがわかり興味がなくなった (4.1%)

(30) 高校でもこのような形の授業があった方がよいですか。

- ①はい (83.6%)
- ②いいえ (11.5%)

Q 5 (30) で①に○をつけた人 (102名)、その内容を書いて下さい。

- ・同じような形式 (6)
- ・自分たちで進め、役に立つ授業 (2)
- ・製作, 採集, 実験
- ・土曜日 4 時間続きでやりたい
- ・自分で選択する授業

アンケートのまとめと今後の課題

アンケートにより、テーマ学習受講者の授業に対する意識をさぐってみた。その主たる特徴、傾向を以下に列挙してみる。

なお、同じ内容のアンケートを1993年度（45期生）を対象に実施している。93年度はテーマ学習の初年度である。その時の結果と比較し、相違があれば併記する（※）。

1. オリエンテーションと希望調査について

- ・オリエンテーションによる説明では、時間が少ないこともあって必ずしも十分に授業内容が理解されていない。
- ・希望調査の方法は概ね理解を得ており、選択決定の方法は支持されている。
- ・生徒自身の興味と関心に基づいた講座選択をしている。
- ・自由意見として、上位の希望講座に入りたいとの要望があった。

2. 授業時間の学習について

- ・授業時間内では通常の授業と同程度かそれ以上に学ぶことができている。
- ・授業形態については講義、実験、観察、実演、フィールドワークなど、通常の授業でとられない形態に積極的に取り組んでいる。
- ・一方、書物、文献の検討やレポートや作品の製作などには負担を感じている。
- ・受講した講座によっては授業時数の少なさを指摘する者もあった。

※ 4年前に比べて、書物、文献の検討に対する興味や関心の度合いが低下している。

推測だが、最近の生徒の文字離れと関係しているように思われる。

3. 授業時間外の学習について

- ・授業時間外でも割合と積極的に取り組んでおり、書物や文献の検討、レポートや作品の製作に時間を費やしている。しかし、一方でレポートに負担を感じている者もいる。

4. 研究成果の発表について

- ・研究の発表については、成果を感じている一方で、負担も大きかったとしている者が最も多い。ただし、負担感については個人差がある。

5. 後期の講座全般について

- ・テーマ学習に関して、意欲的に取り組み、学習後もその成果に概ね満足している。
- ・自由意見として、前後期同じ科目が設定されることを望んでいる。

6. 後期の講座の取り組みについて

- ・前期より希望順位が高いか低いかによって、学習する姿勢や成果のとらえ方に差が出ている。

7. テーマ学習と将来の進路との関係について

- ・テーマ学習の受講が即進路と直結はしていない。この点については将来的に追跡調査をこな

いと把握は難しい。

・高校でもこのような形式の授業を望む生徒が多い。

93年度から、生徒の意識に大きな変化はなく、むしろ、テーマ学習の内容や仕組みに対する認識が深まっている。生徒はその内容にほぼ満足しているといえよう。

VI 成果と今後の課題

この2年間の個々の講座の成果と課題については、Ⅲ・Ⅳ章で各担当者が分析している。また生徒の側の意向はⅤ章でアンケート分析の形で示されている。ここでは、それらを通しての「テーマ学習」の現段階での成果と課題について、簡単なまとめを試みる。なお学校全体として、このことについて十分議論する時間はまだとれていないので、一個人の感想であることをお断りしておく。

「テーマ学習」の二つの目的に沿って1996～97年度の実践を考察してみると、次のようになるうか。

①「既存の教科では必ずしも包摂できない分野や内容をも含めた諸領域での学習活動」

通常の授業ではできなかったテーマを各担当者とも提示しており、教員の側の専門や関心を前面に出したテーマが設定されてきた。教える側の熱意が教育の基本であるとするならば、その効果は大きいものといえる。大学でのゼミ教育的な側面を有した講座もあったといえる。しかし、当初一つの考え方としてあった学際的アプローチには至っていない。それを克服する試みが98年度からの隔週土曜日4時間連続授業であろう。ただし、テーマや教科の特性によっては97年度までの毎週火曜日2時間連続授業のほうが適しているものもある。隔週土曜では間隔があきすぎて、継続性や連続性が薄れるからである。テーマによってどちらの形態もとれる弾力的な運用ができればよいが、時間割などの物理的な問題が存在するため、どちらかになっているのが現状である。

②「自らが選択したテーマを少人数で主体的に探求する学習活動」

だいたいにおいて十数人から20人程度の講座であり、40人学級ではできないことに取り組めたことは評価できるだろう。少人数なるがゆえに、生徒が発言する機会も多く、また作業や調査などもやりやすかったし、教員の目も行き届きやすかった。ただし、主体的に取り組めたかどうかでは、自分で選択したとはいえ、教員の側から設定されたテーマの意図を十分に理解しえないケースも少数ながらあった。より生徒の主体的探求を求めるならば、個々の生徒の問題関心からの

テーマ設定を、教員が補助・サポートする形になろうか。しかし、そうした形との比較・検討は今後の検討課題である。

5年間のテーマ学習の実践を経て、1998年度（本年度）からは隔週土曜日4時間連続授業となり、複数の教員でチームを組む講座も始まった。外部からの講師を呼びやすくなるための予算措置も、限られたものではあるが、実施された。ただ中高一貫という本校の方針のなかで、高校との連関をどうとっていくか、「総合的な学習」とはどうからんでいくのか、日常の教科学習との関連、行事や学活とのつながりなど残された検討課題も多い。

新方式については、11月の本校教育研究会で一部をご覧いただき、外部の方のご批判をあおいだ上で、来年度以降に報告できるであろう。最初から予期していたわけではないが、2002年から始まることになった「総合的な学習」に対し、本校として取り組む貴重なデータや蓄積が、このテーマ学習にはある。

（文責 宮崎 章）